

フランス語擬似関係節の諸相  
— Diverses facettes des pseudo-relatives en français —

1. はじめに

(1) ここで扱うのは次のような関係節である。i.以外の例は Sandfeld (1936) より。

a. 〈主語＋être＋場所＋qui...〉構文

Lazare était encore là *qui la regardait*.

ラザロはまだそこで彼女を見ていた。

b. 〈主語＋être＋数＋qui...〉構文

Nous sommes ici douze *qui marchons comme un seul homme*.

我々はここで 15 人が一丸となって一人の男のように歩んでいる。

c. 〈主語＋avoir＋直接目的補語＋qui...〉構文

J'ai Jenny *qui m'attend au d'Harcourt*.

ジェニーがダルクールで私を待っているんだ。

J'ai la tête *qui tourne*. (直接目的補語は体の一部)

頭がくらくらする。

d. 〈主語＋知覚動詞＋直接目的補語(人)＋qui...〉構文

Il la vit *qui traversait la rue de l'Ecole-de-Médecine*.

彼には彼女がエコール・ド・メディシン通りを渡るのが見えた。

e. 〈Voilà＋名詞句＋qui...〉構文

Voilà le jour *qui baisse*.

日が暮れてきた。

f. 〈C'est＋名詞句＋qui / que...構文〉

Heureusement, un pas se fit entendre, c'était le mari *qui montait*.

幸いなことに足音が聞こえて来た。夫が上に上って来たのだ。

g. 〈名詞句＋qui / que...〉構文

Qu'est-ce c'est donc que ce bruit ? — Des peupliers *qu'on nous abat*.

「いったいあの音は何ですか」「ポプラの木を切ってもらっているのですよ」

h. 〈(et)＋名詞句・代名詞＋qui...〉構文

Une demande en mariage ! Et Perrichon *qui n'est pas là !*

結婚の申し込みだ！ だというのにペリションがいないときた！

i. 〈Il y a＋名詞句＋qui...〉構文

Il faut appeler le plombier. Il y a *un tuyau qui fuit*. (Rothenberg 1971)

水道屋を呼ばなくては。水道管が水漏れしているのだ。

ここでは上に挙げたような関係節を、日本のフランス語学の伝統にしたがって擬似関係節 (pseudo-relative) と呼ぶ。これらの関係節が問題となるのは、ふつう区別されている制限的關係節・非制限的關係節のどちらとも異なる振る舞いを示すからである。

(2) 制限的・非制限的關係節とのちがい

- a. 制限的關係節は先行詞が表す指示対象の集合の外延を狭める働きを持つが、擬似關係節はそうではない。

i) *Les élèves qui n'ont pas remis leurs devoirs ont été retenus.* [制限節]

宿題を提出しなかった生徒は居残りを命じられた。

→ 生徒全体の集合を、宿題を提出した生徒としなかった生徒の二つに分割し、集合の外延を狭めている。

ii) *Je sens mes jambes qui tremblent encore.* [擬似關係節]

まだ脚が震えているのを感じる。

→ 「私の脚」の集合を、「震えている脚」と「震えていない脚」とに分割しているわけではない。

先行詞が表す集合の外延を狭めることがないという性質は、非制限的關係節と共通している。

iii) *Nous avons croisé les parents de Nicole, qui habitent rue Bonaparte.* [非制限節]

私たちはニコルの両親とすれ違った。両親はボナパルト通りに住んでいる。

非制限的關係節が先行詞が表す集合の外延を狭めないのは、先行詞 (*les parents de Nicole*) の指示対象がすでに談話内で確立していて、それ以上の限定を受ける必要がないためである。擬似關係節においても同様に、先行詞の指示対象は確立済みだと考えられる。

#### 【注意】

2020 年の秋学期の講義で述べたように、定説となっている「先行詞が表す指示対象の外延を限定する」という制限的關係節の性質は、次の i) のように先行詞が不定名詞句のときや、ii) のような継続的關係節 (*continuative relative*) には当てはまらない。

i) *Pierre a des amis qui travaillent chez Renault.*

ピエールにはルノー社で働いている友人が数人いる。

ii) *Il mangea de ces fruits qu'il trouva délicieux.*

彼はその果物をいくつか食べたが、それはとびきり美味だった。

- b. 制限的關係節は、先行詞が固有名詞やすでに限定されている名詞句であってはならないが、擬似關係節にはそのような制約はない。むしろ固有名詞や限定済みの名詞句の方が多く観察される。

i) *\*Nicole que vous avez rencontrée à l'exposition est une amie de ma sœur.* [制限節]

あなたが展覧会で会ったニコルは私の妹の友達だ。

ii) *Monsieur, c'est M. le prince de Chagres qui est en bas.* [擬似關係節]

旦那様、チャグレス殿下が下においでになっています。

iii) *Mon Dieu ! dit-il, monsieur Michel qui est mort !* [擬似關係節]

何ということ！ ミッシェル様が亡くなりました！

固有名詞や限定済みの名詞が先行詞になれるのは非制限的關係節と同じである。

iv) *Victor Hugo, qui a écrit de nombreux romans et pièces de théâtre, est sans doute le plus grand écrivain du XIX<sup>e</sup> siècle.* [非制限節]

ヴィクトル・ユゴーは多くの小説や戯曲を書いたが、19 世紀で最も偉大な作家であろう。

c. 制限的關係節は定代名詞を先行詞とすることはできない。

i) Elle a admiré les tableaux *qui étaient exposés*. [制限節]

彼女は展示されていた絵を鑑賞した。

→ \*Elle **les** a admirés *qui étaient exposés*.

le, la, les などの定代名詞は先行文脈で既出のものを表し、その指示対象は確立しているのので、制限的關係節を付けてそれ以上限定することができないためである。ただし不定代名詞 **en** は先行詞になれる。**en** は不定指示（どれでもよいくつか）であり、特定の指示対象をさすことがないためである。

ii) Des tomates ? Oui, on **en** a *qui sont fraîches*. [制限節]

トマトですか。ええ、新鮮なのがありますよ。

これにたいして擬似關係節では定代名詞を先行詞とすることが可能で、実際に用例も多い。

iii) Il est là *qui nous attend*. [擬似關係節]

彼があそこで私たちが待っている。→ 先行詞は **il**

iv) Je l'ai vue *qui pleurait*. [擬似關係節]

私は彼女が泣いているのを見た。→ 先行詞は **la**

非制限的關係節でも定代名詞は先行詞になることはできない。

v) Nous avons visité le monument de Scott, *qui est le symbole d'Edinbourg*.

私たちはエジンバラのシンボルのスコット記念塔を見物した。

→ \*Nous l'avons visité, *qui est le symbole d'Edinbourg*.

したがって、定代名詞が先行詞になれるということは、制限節にも非制限節にも見られない擬似關係節独自の特徴だということになる。このことは擬似關係節の本質につながる重要なポイントである。

【注意】

上に挙げた擬似關係節の中では、〈J'ai SN qui...〉型と〈Il y a SN qui...〉型は先行詞が代名詞であってはならない。ただしこれは擬似關係節そのものの問題ではなく、これらの構文の特性に由来するものと考えられる。

vi) J'ai la tête *qui tourne*. 頭がくらくらする。

→ \*Je l'ai *qui tourne*.

vii) Il y a mon père *qui est malade*. 父が病気なんだ。

→ \*Il l'y a *qui est malade*.

d. 制限的關係節では [先行詞+關係節] がひとつの構成素 (constituent) であり、統語的操作ではまとまって移動する。このことは制限節の關係節が付加形容詞と同じ働きをしていることを示す。

i) 受動化

On apprécie beaucoup le riz *qui est cultivé en Italie*.

イタリアで栽培された米はとても評価が高い。

→ *Le riz qui est cultivé en Italie est apprécié beaucoup.*

ii) 代名詞化

*Elle a mangé les croissants qu'elle avait achetés la veille.*

彼女は前の日に買ってあったクロワッサンを食べた。

→ *Elle les a mangés.*

iii) 部分疑問文

*Elle a mangé les croissants qu'elle avait achetés la veille.*

彼女は前の日に買ってあったクロワッサンを食べた。

→ *Qu'est-ce qu'elle a mangé ?*

これにたいして、擬似関係節の [先行詞+関係節] は一つの構成素ではない。このことは擬似関係節が付加形容詞の働きをしていないことを示す。

iv) 受動化

*J'ai vu Blanche qui traversait la rue.*

私はブランシュが通りを横断しているのを見た。

→ *Blanche a été vue qui traversait la rue.*

ブランシュは通りを横断しているのを見られた。

v) 代名詞化

*J'ai vu Blanche qui traversait la rue.*

私はブランシュが通りを横断しているのを見た。

→ *Je l'ai vue qui traversait la rue.*

- e. 制限的關係節の先行詞は關係節の主語 (qui)、直接目的補語 (que)、間接目的補語 (à qui)、属格 (dont)など、いろいろな文法役割を担うことができる。

i) *Les élèves qui ont séché la leçon ont été punis.* [主語]

授業をさぼった生徒は罰をくらった。

ii) *La dame que vous demandez a déménagé le mois dernier.* [直接目的補語]

あなたがおたずねの婦人は先月引っ越しました。

iii) *Il a rangé le couteau avec lequel il a coupé le pain.* [状況補語]

彼はパンを切るのに使ったナイフを片づけた。

しかるに擬似關係節の關係代名詞はほぼ qui に限定され、一部に que が可能であるに留まる。他の文法役割は不可能である。

iv) *J'ai la mémoire qui flanche.*

私は物覚えが悪くなってきた。

v) *Vivre de son traitement, c'est la chemise de jour qu'on hésite à changer, le tramway qu'on ne prend pas...*

給料だけで生活するという事は、ワイシャツを新しいのに着替えるのをためらい、路面電車に乗らないということだ。

vi) *\*J'ai vu Marie que Jean embrassait.*

私はジャンがマリーにキスしているのを見た。

vii) *Qu'est-ce c'est que ce bruit ? — \*C'est Jean à qui son père donne des leçons.*

「あの物音は何ですか」「父親がジャンに稽古をつけているのです」

f. 同じ種類の関係節は **et** で結んで複数並列することができる。

i) 制限節＋制限節

Il a acheté un appartement *qui est situé rue Bonaparte et qui a été récemment aménagé.*

彼はボナパルト通りにおいて、最近リフォームされたアパルトマンを買った。

ii) 非制限節＋非制限節

Nous sommes allés au célèbre café Deux Magots, *qui se trouve tout près de l'église Saint-Germain-des-Prés et que les existentialistes fréquentait.*

私たちは有名なカフェのドゥ・マゴに行った。そこはサン・ジェルマン・デ・プレ教会のすぐそばにあり、実存主義者たちが通っていた所だ。

しかし擬似関係節は制限節と並列することができない。これは擬似関係節が制限節と同じタイプの関係節ではないことを示している。

iii) \*Voilà la jeune fille *qui arrive et que vous avez vue au musée.*

ほらあなたが美術館で会った少女がやって来た。

iv) \*J'ai vu un bébé *qui pleurait et qui était blond.*

私は金髪の赤ん坊が泣いているのを見た。

## 2. 擬似関係節研究前史 - その 1 Sandfeld (1936)

(1) この講義で扱うタイプの関係節の難点は、呼び名が決まっていないということである。日本のフランス語学では「擬似関係節」という呼び名が一般的だが、それはフランス語学の世界に限られる。日本の英語学界で擬似関係節 (pseudo-relative) といえ、McCawley が取り上げた *There are many Americans who like opera.* というまったく異なる構文をさす。

19 世紀に Tobler や Meyer-Lübke は知覚動詞を用いた *Je vois Marie qui pleure.* のような関係節を「叙述的關係節」(relative prédicative) と名付けた。それは *qui pleure* にふつうの関係節のような形容修飾機能がなく、*Marie* と *qui pleure* の間に主述關係 (prédication) が認められると考えたためである。ここで扱う構文を幅広く取り上げて分析したのは Sandfeld (1936) で、その後の研究は大なり小なり Sandfeld を基礎としている。まず Sandfeld の研究を概観しておこう。

(2) 呼び名について

Sandfeld はここで扱う関係節を一括して *propositions relatives dépendantes attributs* と呼ぶ。Sandfeld の用語で「従属的關係節」(*propositions relatives dépendantes*) とは制限節と非制限節をまとめたものをさす。「属詞として働く従属的關係節」という呼び名は、ふつうの関係節のように付加形容詞の働きをするのではなく、主節の主語や直接目的補語の属詞であると見なしているからである。

確かに擬似関係節と次のような間接属詞の間には類似が見られる。

a. Il était là *debout.* 彼はそこに立っていた。〔主語の間接属詞〕

b. Il était là *qui nous attendait*. 彼はそこで私たちを待っていた。

c. Je l'ai trouvé *dormant*. 私は彼が眠っているのを見つけた。〔直接目的補語の間接属詞〕

d. Je l'ai trouvé *qui dormait*. 私は彼が眠っているのを見つけた。

(3) Sandfeld は〈名詞句・代名詞＋擬似関係節〉がさまざまな文法的役割を担い、いろいろな構文に表れることを豊富な例文で示している。

a. 主語として

Son pantalon blanc *qu'il a remonté* laisse admirer *qu'il a des bottes*.

彼がズボンの裾をまくっているものだから、ブーツを履いているのがよく見える。

**N. B.** 他の場合とちがって関係代名詞が *que* に限られるという特徴がある。

b. 転位構文で

la nuit *qui tombe, l'hiver, à quatre heures, c'est affreux*.

冬に 4 時になると日が暮れるのは恐ろしい。

Tiens ! Ces éventails *qu'il nous a donnés, j'ai trouvé cela gentil*.

ほら。あの人が私たちにこの扇子をくれたのはうれしいことでした。

**N. B.** 関係代名詞は *qui* と *que* が使える。

c. 直接目的補語として

i) 知覚動詞構文

Jacques l'entendit *qui sifflait un refrain à la mode*.

流行っている歌のリフレインを彼が口笛で吹くのがジャックに聞こえた。

ii) avoir 構文

J'ai mon dernier, Gustave, *qui prépare sa cinquième*.

うちの末っ子のギュスターヴが第 5 学年進級の準備中なのです。

Tu as le sang *qui ne circule pas*.

君は血行が悪いのだ。

d. *c'est* 構文の属詞として

Un petit air de flute se fit entendre dans la cour. C'était Pierrotte *qu'on appelait au magasin*. 中庭に笛の音が響いた。ピエロットに店に戻るように呼んでいたのだ。

**N. B.** 関係代名詞は *qui* と *que* が使える。

Maman ! c'est Augustine *qui laisse tomber son pain dans la rôtissoire* !

ママ。オーギュスティーヌがパンをロースターに落としてるよ。

e. 前置詞とともに状況補語として

Je n'ai pas osé refuser à cause de maman *qui me faisait des signes*.

ママが合図を送ってくるものだから、断ることができなかった。

f. 同格

Alors, ce fut la scène habituelle, dans toute sa médiocre désolation : les cordes *que l'on passe sous la bière, un des fossoyeurs qui se trouve être moins robuste que l'autre...*

続いていつもの光景がありふれた嘆きの中で続いた。棺桶の下にロープを回す。墓掘り人夫の一人がもう一人より力が足りない。

**N. B.** 関係代名詞は *qui* と *que* が使える。

g. 絶対構文で

Quatre hommes à plat ventre ou sur le dos, dégringolant presque à pic d'un névé, les bras jetés, les mains *qui tâtent*,

4 人の男が腹ばいになったり仰向けになったりして、万年雪のある頂上近くからころがり落ちている。腕は投げ出され、手は必死にあたりを探っている。

f. 単独で

Maman ! — Quoi ? — Alfred *qui pleure*.

「ママ」「何?」「アルフレッドが泣いているよ」

Il faut rentrer de bonne heure. — De bonne heure, et pourquoi ? — Notre charade *que nous répétons*.

「早く帰らなくては」「早くってどうして」「なぞなぞ遊びの練習をしなくては」

**N. B.** 関係代名詞は *qui* と *que* が使える。

g. 先行詞と擬似関係節が分離され、擬似関係節が間接属詞として働いている場合

Son fils est là *qui le veille*.

彼の息子がそこで彼を見張っている。

Nous serons pas mal de camarades belges, *qui ferons la même chose*.

私たちの同胞のベルギー人の多くが同じことをするだろう。

Un frisson passa *qui annonçait la catastrophe prochaine*.

また次の災害が起きるだろうという予感がよぎった。

**N. B.** 3 つ目は擬似関係節ではなく、Un frisson *qui annonçait la catastrophe prochaine* passa. という制限的關係節で、關係節の外置 (extraposition) が起きたものと見なすべきである。

(4) 判断の難しさ

知覚動詞構文の *J'ai entendu Marie qui chantait*. 「マリーが歌っているのが聞こえた」のようなケースでは、先行詞が固有名詞なので制限節ではなく、またコンマがなく、關係代名詞を *laquelle* と置き換えできないので非制限節でもないことは明らかである。しかし判断が微妙な場合もある。

a. Des cris féroces, des mots abominables du fond de la cour . C'était Rachel, *que Berthe chassait et qui se soulageait dans l'escalier de service*.

中庭の奥から恐ろしい叫び声と口汚い罵りが聞こえた。ベルトが追い払ったラシェルが使用人用の階段で糞をしたのだ。

→ 先行詞 *Rachel* の後にコンマがあるので非制限節の可能性が高い。しかし *qui se soulageait...* は擬似關係節と見るのが妥当なので、非制限節と擬似關係節が等位接続されているのだろうか？

b. Il y a un tuyau *qui fuit*. 水道管から水漏れしているのだ。

→ *il y a* 構文で不定名詞句が使われているときは制限節と取って、「水漏れしている水道管がある」のようにふつうの *il y a* 構文の訳をすることもできる。

c. Cyrano ! — Qu'est-ce ? — Une énorme grive *qu'on t'apporte* !

「シラノ」「何だい」「大きなツグミを持って来てくれたよ」

→ 先行詞は不定名詞句なので、制限節と見なして「持って来てくれた大きなツグミだよ」と解釈することもできる。

(5) 〈名詞句・代名詞＋擬似関係節〉は文的内容を表す

Sandfeld の研究で最も重要な点は、〈名詞句・代名詞＋擬似関係節〉が形の上では大きな名詞句なのに、その実は「短縮された文」(phrase raccourcie)であり、〈主語＋述語〉からなる文と同じ意味を表すとしたことである。

Dans beaucoup de cas, la combinaison substantif (ou pronom personnel)+proposition relative attribut peut être regardée comme une phrase raccourcie, et elle peut à son tour être employée comme sujet, régime, attribut, etc. C'est le même phénomène qui se présente avec la combinaison substantif+participe attribut dans des cas comme : *Tout ce vin bu lui saignait le cœur* (c'est-à-dire : « le fait qu'on avait bu tout ce vin »). *Il relatait le crucifix décroché du mur* (c'est-à-dire : « qu'on avait décroché le crucifix » ou « le décrochement du crucifix »). *Si on s'attardait une heure, c'était sûrement la ligne de retraite sur Belfort coupée* (c'est-à-dire : « cela aurait pour résultat que la ligne serait coupée »). *Celle-ci avait quelque honte de sa sœur mariée à un ouvrier* (c'est-à-dire : « de ce que sa sœur était mariée à un ouvrier »).

(Sandfeld 1936 : 144-145)

多くの場合、名詞句（または人称代名詞）＋属詞的關係節の組み合わせは、短縮された文と見なすことができる。そしてその組み合わせは、今度は主語や直接目的補語や属詞として使うことができる。これは次のような名詞句＋属詞的分詞の組み合わせに見られるのと同じ現象である。「ワインをたくさん飲んだために彼は胸が苦しかった」（つまり「ワインをたくさん飲んだことが」）、「彼は十字架像が壁から外されたことを語った」（つまり「十字架像が壁から外されたと」または「十字架像が外されたことを」）、「もしあと一時間ぐずぐずしていたら、ベルフォールの退却線は分断されるだろう」（つまり「退却線が分断される結果となるだろう」）。「その人は姉が労働者と結婚したことに少し恥ずかしい気持ちを持っていた」（つまり「姉が労働者と結婚したので」）。

(6) また Sandfeld は〈C'est＋名詞句＋qui / que...〉構文が、多く質問に対する答として用いられることを指摘している。これも重要なポイントである。

On se sert souvent de ce tour pour répondre à une question : *Qu'est-ce que c'est ? — Monsieur, c'est le maître d'étude qui m'envoie vous dire que j'ai les mains sales. (...)* *Qu'est ce que vous avez donc ? — C'est le contrefort qui m'a écorché le talon.*

(Sandfeld 1936 : 150)

この言い回しは質問への答に用いられることが多い。「何ですか」「僕の手が汚れていると伝えるようにと自習監督の先生に言われました」(…)「どうしたのですか」「控え壁にぶつけて靴の踵に傷が付いてしまったのです」

#### 【考察】

まず上の例の *c'est ... qui...* 構文は強調構文ではない。2つ目の例を「私の靴の踵を傷付けたのは控え壁です」と訳すことはできない。また関係節をふつうの制限節と見なして、「それは私の靴に傷を付けた控え壁です」とすると、*Qu'est-ce que vous avez*

donc ? 「一体どうしたのですか」という質問にたいする適切な答にならない。「どうしたのか」は出来事を問う疑問文なので、答も出来事を述べなくてはならない。したがって *C'est le contrefort qui m'a écorché le talon.* は、*Le contrefort m'a écorché le talon.* 「控え壁が私の靴の踵に傷を付けた」という文と同じ意味を表すことになる。

このことは、ある関係節が擬似関係節であると判定するためには、当該の文だけを観察するのでは不十分であることを示している。擬似関係節だと判断できるのは、何らかの間にたいする答として、〈先行詞+関係節〉が文として振る舞い、「出来事を表している」ということが最終的な基準となる。

(7) また Sandfeld はこの言い回しが答となる質問は、明示的に表される必要はなく、文脈や状況が潜在的に問を含んでいればよいとも指摘している。

*L'interrogation n'a pas besoin d'être exprimée. Souvent, elle est anticipée par la réponse. Une bonne entre et dit sans attendre d'être interrogée sur le motif de son entrée : Madame, C'est Désiré en bas qui demande si... (...) Dans des cas comme : Maman ! c'est Augustine qui met ses mains dans mon assiette !, il y a anticipation du Qu'est-ce qu'il y a ? qu'on attendrait de la part de la mère après l'interpellation Maman ! (Sandfeld 1936 : 151)*

質問をはっきり述べる必要はない。質問を待たずに答えることもよくある。女中が部屋に入って来る。なぜ入って来たのかたずねられる前に、「奥様、デジレが下に来てたずねているのですが…」と言う。(…)「ママ！オーギュスティーヌが僕のお皿に手を突っ込んでよ！」の場合は、「ママ！」という呼びかけがきっかけで、母親が言うであろう「何ですか」という質問を先取りして答えているのである。

#### 【考察】

ここで問題となっている〈*C'est ... qui /que...*〉構文は、単独で発話されることはなく、*Qu'est-ce qu'il y a ?* 「何があったのですか」、*Qu'est-ce vous avez ?* 「どうしたのですか」という質問の答として用いられるものであることがわかる。また質問は明示的に発せられる必要はなく、「女中が部屋に入って来る」のような状況が問を含むものであればこの構文を使うことができる。つまり場に含まれた問があればよいのである。例えば次の例文では、通りすがりの人が発した *Madame* という呼びかけが「何ですか？」という潜在的な質問を誘発する。

##### a. *Madame, votre broche qui se décroche.*

もしもし、あなたのブローチが外れかけですよ。

また次の例では *Oh ! non.* 「いいえ」という否定の返答が、「それはいったいなぜですか？」という潜在的な質問を誘発する。

##### b. *Vous allez aussi pour le grand prix ? — Oh ! non. De grosses questions ouvrières qui réclament ma présence à Paris.*

「グランプリにもいらっしゃいますか」「いいや、大事な労働問題があつて、私はパリにいないといけないんだよ」

*Je vois Pierre qui joue dans le jardin.* 「ピエールが庭で遊んでいるのが見える」のような知覚動詞構文も、決して談話の最初に使われることはないとされている。

... de même, en situation de discours normale, on ne produit de construction à R. D.

[=relative déictique] que par réponse. Ainsi il me semble que des phrases comme (218) sont extrêmement peu naturelles (au présent) hors contexte discursif, c'est-à-dire si un interlocuteur n'a pas manifesté une demande d'information, alors qu'au contraire, des phrases comme (219) sont possibles pour introduire un discours ou une discussion.

(218) Je me promène avec ma petite amie.

Je {vois / imagine} Paul qui boit du whisky.

(219) Je suis convaincu que Paul est imbécile.

Je {imagine / découvre / m'aperçois / suppose} que Paul boit du whisky.

(Cadiot 1976)

同じように通常の談話の状況では、知覚動詞構文は返答としてのみ用いられる。たとえば(218)のような文は談話的文脈、つまり対話相手が情報を求める態度を表す場合以外では、非常に不自然な発話である。逆に(219)のような文は、それで談話や議論を始めることができる。

(218) 私は恋人と散歩している。

私にはポールがウィスキーを飲んでいるのが {見える / 目に浮かぶ}。

(219) 私はポールがばかだと確信している。

私はポールがウィスキーを飲んでいる {のではないかと思う / ところを見つける / ことに気づく / のだと思ふ}。

Sandfeld や Cadiot が述べていることを総合すると、擬似関係節は**対話的性格 (caractère dialogique)** を強く持っているのである。

#### (8) 問題提起

- (A) なぜ擬似関係節は対話的性格を持っているのだろうか。
- (B) なぜ擬似関係節で談話を開始することができないのだろうか。
- (C) この対話的性格は擬似関係節のどのような特徴に由来するのだろうか。

### 3. 擬似関係節研究前史 - その2 Rothenberg (1971)

Sandfeld の研究は先駆的役割を果たしたが、文法的役割に基づいて用例を分類したもので、擬似関係節構文が用いられる文脈・状況や、課される制約については少ししか触れていない。これらの問題について研究を行ったのは Rothenberg (1971) である。Mira Rothenberg はエルサレムのヘブライ大学教授。

まず Rothenberg (1971) が取り上げた構文の分析から見てみよう。Rothenberg は多くの例文を Sandfeld から借用している。

#### (1) 〈C'est + 名詞句 + qui / que...〉 構文

a. Drelindin din ! ... C'est la messe de minuit *qui commence*.

ガララン。深夜のミサが始まります。

b. Madame, c'est Monsieur *qui demande si Madame est éveillée*.

奥様、旦那様が奥様はお目覚めかおたずねです。

c Ce n'est rien ; c'est une femme *qui se noie* ! (La Fontaine)

何でもなし。女が溺れているのさ。

この構文の特徴は以下のとおりである。Rothenberg は例文を挙げないことも多いため、以下で [作例] とあるのは東郷による作例である。

i) 主節の *c'est* は否定できない。否定すると強調構文になる。

*Ce n'est pas Trotte-Chemin qui rentre.*

「帰って来たのは Trotte-Chemin ではありません」

ii) *Qu'est-ce que c'est ?* の答となる。(Sandfeld がすでに指摘している)

iii) 関係代名詞は *qui* と *que* に限られる。他の関係代名詞は現れない。

iv) 関係節の動詞の時制は現在か半過去に限られる。

v) *C'est* の時制は現在と半過去に限られる。

vi) *C'est* の後の置けるのは名詞句か固有名詞だけで、それに加えて副詞などの他の要素は置くことができない。

N. B. 例文がないが、おそらく *C'est {sûrement / sans doute} mon père qui rentre.* [作例] のようなケースだと思われる。副詞を入れると、「帰って来たのは {確かに / たぶん} 父です」のように強調構文になる。

vii) 文意を損なわずに関係節を省略することができない。

Rothenberg はこの構文の機能について次のように述べている。

... le type étudié ici [=c'est... qui 構文] identifie à la fois l'auteur ou le siège du procès et le procès lui-même qui devient ainsi une sorte de propriété attachée à son auteur ou à son siège. (...) le syntagme *La messe de minuit qui commence* introduit par C'EST, dans la construction sous rubrique, est un PRÉDICAT qui identifie le THÈME explicite ou implicite constitué par la situation (son de cloches, bruit de pas, « vivre de son traitement », etc.) (Rothenberg 1971 : 105)

ここで取り上げている構文は、事行の行為者もしくは事行が展開する場と、行為者や場の性質の一部となった事行そのものを同時に同定する。(…) 問題の構文で C'EST によって導入された「深夜のミサが始まる」という語句は述語であり、状況が構成する主題を同定する。主題は明示的なこともあれば、暗黙のうちに示されることもある(鐘の音、足音、「給料で生活すること」など)。

### 【考察】

Rothenberg はこの構文について、文脈や状況に含まれる *Qu'est-ce que c'est ?* 「あれは何ですか」という問に答えるものであり、同定機能を持つとしている。

同定とは、「それは何か」を述べるもので、その典型は次のような文である。

a. *Qu'est-ce que c'est ? — C'est une poubelle.*

「あれは何ですか」「あれはゴミ箱です」

ふつう同定の対象となるのは人や物で、名詞句や固有名詞で表されるものである。しかし *c'est... qui...* 構文は、人や物を含む出来事 (*procès*) だといううちがいがあ。ということは *C'est la messe de minuit qui commence.* の〈先行詞+擬似関係節〉は出来事を表すということになる。

続けて Rothenberg は、〈先行詞+擬似関係節〉は述語 (*prédictat*) であり、文脈や状況に含まれる主題 (*thème*) を同定すると述べている。多少用語が混乱していることに

注意しなくてはならない。述語 (*prédicat*) とペアになるのは主語 (*sujet*) である。主語・述語は文の文法レベルの概念である。一方、主題 (*thème*) はふつう解説 (*rhème*) とペアで用いられる談話レベルの概念である。用語の混乱を修正すると、「*c'est...qui..* 構文は、文脈・状況に含まれた主題を同定する解説として働く」となる。図式で表すと次のようになる。

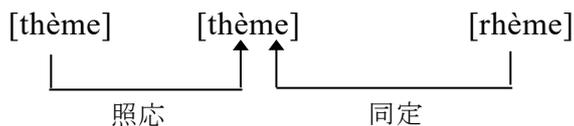
Drelindin din ! ... C'est la messe de minuit qui commence.



「ガランガラン。(あの音は何かという) 深夜ミサが始まるのだ」

「ガランガラン」という音が主題となり、*la messe de minuit qui commence* がそれを同定する解説だとすると、残る *c'est* がどのような役割を果たしているかという問題が残る。主語の指示代名詞 *ce* は形式的な主語ではなく、前方照応的に主題を指しており、次のような有題文であると考えべきである。

Drelindin din ! ... [Ce] est [la messe de minuit qui commence]



**N. B.** 〈*C'est* + 名詞句 + *qui / que...*〉 構文が、*CE* の指示対象を主題とする有題文であることは、平塚 (1991) がすでに指摘している。

(2) 〈*Il y a* + 名詞句 + *qui...*〉 構文

a. [帰宅すると家族が毛布にくるまっている。どうしたのだとたずねると]

*Il y a le chauffage qui ne marche pas.*

暖房が故障しているんだ。

b. [いつもは日曜に営業している店が閉まっている。怪訝そうな顔をすると]

*Il y a Charles qui se marie.*

シャルルが結婚するんだよ。

c. *Maman, il y a ma poupée qui s'est cassée !*

ママ、お人形さんが壊れちゃった。

この構文には次のような特徴があるとしている。

i) *Qu'est-ce qu'il y a ?* 「何があったの?」、*Quoi ?* 「何?」、*Pourquoi ?* 「なぜ?」という問の答となる。

ii) 関係代名詞は多く *qui* だが、一部で *que* も用いられる。

*Je ne peux pas venir ; il y a mon article que je n'ai pas terminé.*

私は行けないよ。まだ記事を書き終えていないんだ。

**N. B.** J. M. Léard, *Les gallicismes*, Duculot, 1992. は、この構文では *qui* しか用いることはできないとして意見が割れている。

iii) 先行詞は定でなくてはならない。

**N.B.** しかし *Il y a un tuyau qui fuit.* という例がある。

- iv) 関係節の時制は、現在、近過去、複合過去、半過去、大過去が可能である。未来形は使うことができない。
- v) 主節の *il y a* の時制は現在と半過去に限られる。
- vi) *il y a* は否定することができない。 *Il n'y a pas de tuyau qui fuit.* はふつうの *il y a* 構文で、関係節は制限節である。
- vii) 関係節は否定することができる。  
*Il y a le chauffage qui ne marche pas.*  
 暖房が故障しているんだ。
- viii) 文意を損なわずに関係節を省略できない。

Rothenberg はこの構文の機能について次のように述べている。

Comme le syntagme du tour précédent introduit par C'EST, le syntagme *Charles qui se marie* introduit par IL Y A du type sous rubrique constitue le prédicat. Ce PRÉDICAT est une explication qui constitue la réponse à une question implicite ou explicite demandant la raison de telle ou telle action ou situation qui constituent le THÈME.

(Rothenberg 1971 : 108)

先ほど見た C'EST を用いる言い回しと同じく、IL Y A に導かれた「シャルルが結婚するんだ」という語句は述語である。この述語は、主題となる何らかの行為や状況の理由をたずねる暗黙の、または明示的な質問にたいする答や説明となる。

また *c'est...qui* 構文とのちがいについて、Rothenberg は次のように述べている。

En effet, deux réponses sont possibles à une question comme « Qu'est-ce qu'il y a ? quoi ? » implicite ou explicite : l'une qui identifie la cause, et on a affaire alors à la construction II précédemment étudiés [=C'est...qui 構文], et l'autre explique une situation ou une action. Si la question posée implique un *pourquoi*, seule la réponse avec IL Y A est admise. Ainsi dans la phrase : Est-ce qu'ils sont tous partis ? *Non, il y a Odile qui cherche son chapeau*, la construction avec C'EST est impossible. D'autre part, lorsqu'il ne s'agit pas de l'identification d'une cause, mais de celle d'un bruit, par exemple, la construction avec IL Y A n'est guère admise : On entendait un pas ; *c'était le mari qui montait*.

(Rothenberg 1971 : 106)

実際のところ、潜在的であれ明示的であれ、「何があったのですか？ 何？」という質問には二通りの答ができる。一つは原因を同定する答で、このときは先に見た II の構文 [=C'EST 構文] を用いることになる。そしてもう一つは行為や状況を説明する答である。もし質問が「なぜ」という疑問を含むもならば、IL Y A を用いた答だけが可能である。たとえば「みんなもう帰りましたか」「いいえ、オディルが帽子を探しています」という場合は、C'EST 構文で答えることはできない。一方、原因を探しているのではなく、たとえば物音の正体をたずねているときには、IL Y A 構文を用いた答はほぼできない。物音がしたときは、「夫が上に上がって来たのだ」と [C'EST 構文を用いて] 答えるのである。

【解説】

C'est 構文と Il y a 構文は、どちらも文脈・状況に含まれた主題 (thème) にたいして解説 (rhème) として働くという同じ機能を持っている。しかし、C'est 構文は「同定する」のみにたいして、IL Y A 構文は「説明する」というちがいがあると Rothenberg は述べている。この差は時には微妙である。

i) [物音がする] → [Qu'est-ce que c'est ?] → C'est le mari qui monte.

**Thème**

**Question**

「あれは何だ？」

「夫が上に上がって来ているのだ」

ii) [店が閉まっている] → [Pourquoi ?] → Il y a Charles qui se marie.

**Thème**

**Question**

「なぜだ？」

「シャルルが結婚するのだ」

C'est 構文が Qu'est-ce que c'est ? という問に答える文であることは Le Flem (1993) も指摘している。ただし、二つの構文には次のようなちがいがあ

i) [du bruit] → CE est le mari qui monte.

**Thème**

**Thème**

**Rhème**

CE は発話の場に含まれた主題 du bruit を指している。したがって C'est le mari qui monte. は Ce を主題とする有題文である。

一方、Il y a 構文も文脈・状況に含まれたものを主題とするが、Il y a 構文そのものに主題はない。文全体が解説 (rhème) である。

ii) [le magasin est fermé] → Il y a Charles qui se marie.

説明を求める主題

**Rhème**

擬似関係節を含む文には強い対話的性格があり、対話の中での応答として用いられるとされている。擬似関係節を含む文で談話を開始することはできない。

iii) [いきなり] #C'est ton nez qui coule ! (#は状況に対する不適切さを表す)

君の涙が垂れているよ。

擬似関係節を含む文に対話的性格があることは、Rothenberg の考察によって説明することができる。C'est 構文も Il y a 構文も文脈や状況に含まれている主題 (thème) を同定したり説明したりする働きがある。主題にたいする応答であるという点に、対話的性格の源があると考えられる。このため何も設定された主題がない談話の冒頭でこの構文を使うことはできないのである。

ただし、平塚 (1991) は Il y a 構文はいきなり使えると指摘している。

iv) [いきなり] Il y a ton nez qui coule !

君、涙が垂れてるよ。

Le facteur qui passe. 「郵便屋さんが通る」という〈名詞句+qui...〉構文もいきなり使うことができる。しかしこのような場合でも、「対話相手の涙が垂れている」、「窓から郵便局員の姿が見える、自転車の音がする」という出来事が発話の場になくはない。そのような出来事があれば、それが潜在的な主題となり、Il y a 構文を用いることができると考えられる。

(3) 〈C'est+名詞句+qui...〉第2種

a. C'est Sidonie qui va être étonnée !

シドニーはさぞかし驚くことでしょうね！

b. *C'est ton père qui sera content !*

お父さんはきっとお喜びになるわ！

c. *C'est moi qui n'en ferai pas une maladie !*

私は悔しがったりするものか！

この構文には次のような特徴があるとされている。

i) 今まで見てきた *C'est* 構文も *Il y a* 構文も感嘆文として用いられることがある。しかしこの構文は常に感嘆文である。

ii) 明示的・潜在的質問に対する答ではない。何らかの事態を前にしての話し手の反応 (*réaction*) である。

iii) 感嘆的なので、関係節の中の述語は喜怒哀楽を表す心理的述語である。

iv) 関係代名詞は *qui* のみ用いられる。

v) 主節も関係節も否定できる。(関係節の否定は上の c.)

*Ce n'est pas Marie qui en sera fâchée !*

きっとマリーは怒らないさ！

vi) *C'est* に続く名詞句は定 (*défini*) でなくてはならない。1・2 人称の強勢形代名詞も可能だが、3 人称は用いることができない。*C'est lui qui sera content !* は「喜ぶのは彼だろう」という強調構文になる。

vii) 関係節の時制は現在であってはならない。

*C'est Jean qui a été surpris !*

ジャンの驚いたことといたら！

\**C'est Jean qui est surpris !* [作例]

ジャンの驚くことといたら！

viii) *C'est* によって導入される〈名詞句＋関係節〉は述語 (*prédicat*) である。先に見た *C'est* 構文 (第 1 種) が文脈・状況にある主題を同定するのにたいして、この構文は発話状況に存在する主題に対する情意的反応 (*réaction affective*) を表すというちがいがあある。

### 【考察】

この構文は Sandfeld では取り上げられておらず、その後の擬似関係節研究でも言及されていない。このため今だによくわからないことが多い構文である。ただし朝倉文法事典では、*C'est votre frère qui va être ravi !* 「弟さんもさぞかしお喜びのことでしょう」という例文を出して、*Votre frère va être ravi.* の感情的表現としている。

Rothenberg の分析で最も問題なのは、上の viii) の説明である。たとえば子供が試験で 100 点を取ったという出来事にたいして、母親が *C'est ton père qui sera content !* と言うとする。Rothenberg の説明では子供が 100 点を取ったことが *thème* となり、*C'est ton père qui sera content !* が *prédicat* だということになるが、両者が *thème* と *prédicat* の関係にあるというのは無理がある。

(4) 〈Voilà＋名詞句＋*qui*...〉構文

a. *Voilà une maille qui file !*

あら、編み目がほつれちゃった！

b. *Voilà le voleur qui s'enfuit !*

泥棒が逃げて行くぞ！

c. *Quel malheur ! Voilà Jean qui s'en va !*

何て悲しいこと。ジャンが行ってしまうなんて！

この構文には次のような特徴があるとされている。

- i) 常に感嘆文として用いられる。
- ii) 関係代名詞は *qui* のみ。
- iii) 関係節の時制は現在か半過去に限られる。
- iv) 関係節は否定することができない。 *Voilà un jeune homme qui n'arrivera à rien !*  
「あれは何も成し遂げることができない若者だ」は別の構文になる。
- v) 関係節で用いることができるのは *aspect perfectif* の動詞に限られる。  
**N. B.** ここで完了相 (*aspect perfectif*) というのは、*arriver* 「到着する」、*s'enfuir* 「逃げ出す」、*se mettre à pleurer* 「泣き出す」のように瞬間的な動作を表す運動動詞のこと。Vendler の分類の到達動詞 (*achievement verbs*) に当たる。
- vi) 名詞句は代名詞にすることができない。〈名詞句＋関係節〉は始めて言及される新情報 (*élément nouveau*) でなくてはならない。 *Le voilà qui s'enfuit.* 「ほら、彼が逃げて行く」は別の構文である。
- vii) *Voilà* によって導入される〈名詞句＋関係節〉は述語 (*prédicat*) である。この述語は状況に含まれる主題に注意を引きつけ、それにたいする情意的反応を誘発する。

(5) 〈*Et pas*＋名詞句＋*qui...*〉構文

a. *Toujours son nez Bourdon ! ... Et pas une dent qui lui manque !*

あいかわらずのプルボン家の鼻だ。なのに(おまけに)歯が1本も欠けていないとは！

b. *Une demande en mariage ! Et Perrichon qui n'est pas là !*

プロポーズだって！なのにペリションがここにはいないなんて！

c. *Les Dupont sont partis. Et Paul qui m'avait promis de rester !*

デュポン一家は帰ってしまった。ポールは残ると約束していたのに！

この構文には次のような特徴があるとされている。

- i) *et* は追加ではなく対立を表し必須である。ただし、感嘆詞や呼びかけが *et* の代理をすることがある。  
*Mme Dupont a placé Marie à côté de Jean. — Quelle idée ! Pierre qui est déjà si jaloux !*  
「デュポン夫人はマリーをジャンの隣に座らせました」「何ということでしょう！ ジャンはもうすでに焼きもちを焼いているのに！」
- ii) 用いる関係代名詞は *qui* のみである。
- iii) 関係節の時制は、現在、半過去、複合過去、大過去。
- iv) そうあるべき状況と現実の状況の「対比」(*contraste*) を表す。この文は述語であり、現実の状況が主題 (*thème*) となる。

(6) 〈名詞句＋関係節〉 構文

a. *Madame, votre sac qui est ouvert !*

もしもし、バッグの口が開いていますよ！

b. *Viens ! Geroges qui veut te parler.*

おいで。ジョルジュがお前と話したいって。

c. *Maman, oncle Pierre qui s'en va !*

ママ、ピエール叔父さんが帰ってしまうよ！

Rothenberg はこれを独自の構文とは認めておらず、C'est 構文や Il y a 構文の C'est / Il y a が単に省略されたものと見なしている。

i) 〈C'est＋名詞句＋qui / que...〉 構文の省略形

*Qu'est-ce que c'est que ce bruit ? — (C'est) Des peupiers qu'on nous abat.*

「あの音はなんですか」「(あれは) ポプラの木を切ってもらっているんですよ」

*On frappa de nouveau à la porte. (C'était) M. Méjan qui voulait parler à Madame.*

またドアにノックの音がした。(それは) メジャン氏が奥様に話があると来られたのだ。

ii) 〈Il y a＋名詞句＋qui...〉 構文の省略形

*Regardez ! (Il y a) Le vase qui tombe !*

見て！花瓶が倒れる！

*J'ai une peur affreuse. — Pourquoi ? — (Il y a) Frépeau qui n'ose même pas attendre le verdict.*

「私はとても恐ろしい」「どうしてですか」「フレポーが判決が出るまで待とうとしないんです」

iii) 〈Et＋名詞句＋qui ...〉 構文の省略形

*Prosper ! ... Moi qui vous croyais à Metz !*

プロスペルじゃないか！ メスにいるとばかり思っていたのに！

4. 擬似関係節研究前史 - その3 Rothenberg (1979)

Rothenberg (1979) は Rothenberg (1971) ではひとまとめに扱っていた擬似関係節構文を二つのグループに分けることを新たに提案している。その基準は関係節を省略できるかどうかである。

(1) propositions relatives prédicatives 叙述的關係代名詞

関係節は述語として働き、省略することができない。

i) *Paul a le cœur qui bat.*

ポールは胸がどきどきしている。

ii) *Si on ne voyait plus les gens ... pour quelques injures qu'on a échangées avec eux, il n'y aurait pas de relations possibles.*

すこしばかり言い争いしたからといってもう会わないというのなら、人づきあいなんてできないよ。

iii) *Le « tripot » qu'il fait construire dans son jardin, n'implique pas qu'il en ouvrît*

*l'accès au public.*

自分に庭にポーム競技場を作るからといって、それをみんなに開放するとは限らない。

(2) *propositions relatives attributives* 属詞的關係節

關係節は属詞として働き、省略することができる。次の3つの構文がそれである。

i) *Il est là qui pleure.* 彼があそこで泣いている。

ii) *Ils sont nombreux qui pleurent.* 大勢の人が泣いている。

iii) *Marie le voit qui pleure.* マリーには彼が泣いているのが見える。

また属詞的關係節は先行詞が人称代名詞であってもよいという特徴があるとする。これにたいして叙述的關係節では先行詞は人称代名詞であってはならないという。

ただし、古川 (1984) はこの区別を批判して、区別する必要はないと述べている。確かに古川の言うように、それほど有効な区別とも思えない。

5. 擬似關係節の諸問題

(1) Sandfeld (1936) は〈先行詞＋擬似關係節〉は「短縮された文」だとしている。

*Dans beaucoup de cas, la combinaison substantif (ou pronom personnel) + proposition relative attribut peut être regardée comme une phrase raccourcie (...)*

多くの場合、名詞句（または人称代名詞）＋属詞的關係節の組み合わせは、短縮された文と見なすことができる。

古川 (1984) も同じ趣旨のことを述べている。

「擬似關係節が同格的關係節と、そして、さらに決定的に制限的關係節とも、異なる点は、擬似關係節がその先行詞となす連辞が、文的内容を表すという点である。」

(古川 1984 : 115)

(2) 古川はその根拠として次の2点を挙げている。

① 〈先行詞＋擬似關係節〉は、それだけで単独の発話として働くことができる。

*Maman ! — Quoi ? — Alfred qui pleure !*

「ママ！」「なあに？」「アルフレッドが泣いてるよ！」

**N. B.** ただしこのことは十分な根拠とは言えない。名詞句だけでも単独の発話として働くことがあるからである。

*Qu'est-ce que vous avez oublié ? — Mon chapeau.*

「何を忘れたのですか」「私の帽子」

② 〈先行詞＋擬似關係節〉は、人称代名詞系列の *il / elle / le / la* ではなく、指示代名詞系列の *ça, cela, ce* で照応する。

a. *La hanche qui est un peu enflée, cela n'a rien d'étonnant.*

腰が少し腫れているのは何ら驚くことではない。

b. *Ces dames qui vous versent tout d'un coup leurs souvenirs d'enfance, c'est un peu ennuyeux.* ご婦人方が突然子供時代の思い出を長々と話し出すことがあるが、それはいささか退屈だ。

よく知られているように、*ce, ça, cela* は先行する文の内容を受ける。

c. *Pierre va quitter la boîte. — Qui t'a dit ça ?*

「ピエールは会社を辞めるよ」「誰がそう言ったんだい」

〈先行詞＋制限的關係節〉は *ça, cela* で受けることができない。

d. *La maison que tu vois là-bas, {elle / \*cela } est hanté(e) par un fantôme à visage affreux.* あそこに見える家、それは恐ろしい顔の幽霊が取り憑いている。

(3) 古川 (1984) が挙げるもの以外に、次の点を指摘することができる。

a. 〈先行詞＋擬似關係節〉をたずねる部分疑問は、先行詞が人であっても *qui* ではなく *que / qu'est-ce que* である。これは〈先行詞＋擬似關係節〉が「人」ではなく、「コト」を表すことを示している。

i) *Qu'est-ce qu'il y a ? — J'ai Jenny qui m'attend au d'Harcourt.*

「どうしたのですか」「ジェニーがダルクールで私を待っているのです」

ii) *\*Qui est-ce qu'il y a ? — J'ai Jenny qui m'attend au d'Harcourt.*

「誰がいるのですか」「ジェニーがダルクールで私を待っているのです」

(Kaneko 1996)

iii) *Qu'avez-vous vu ? — Marie qui faisait du ski.*

「何を見たのですか」「マリーがスキーをしているのを」

iv) *\*Qui avez-vous vu ? — Marie qui faisait du ski.*

「誰を見たのですか」「マリーがスキーをしているのを」 (Radford 1975)

b. 〈先行詞＋擬似關係節〉は先行詞が人であっても、*celui / celle que* ではなく *ce que* で受ける。これも同様に〈先行詞＋擬似關係節〉が「コト」を表すことを示している。

i) *{ Ce que / \*Celui que } j'ai vu, c'est M. Heath qui dirigeait l'orchestre.*

私が見たのは、ヒース氏がオーケストラを指揮しているところだ。

c. 英語でも同様の事実が指摘されている。例は Declerck (1981) による。

i) *{ What / \*Who } I saw was a girl who snatched a necklace from the counter.*

私が見たのは、女の子がカウンターからネックレスをくすねるところだった。

→ *a girl who snatched a necklace from the counter* を *who* ではなく *what* で受けているのは、人ではなく出来事を表しているからである。

ii) *Two boys who sang a song, I really didn't hear { that / \*them }.*

二人の少年が歌を歌っているのは、ほんとうに聞こえなかった。

→ *two boys who sang a song* は、「歌を歌っている二人の少年」でなく、「二人の少年が歌を歌っている (ところ)」という出来事を表すため *them* ではなく *that* で受ける。

iii) *Some boys who were playing outside { was / \*were } what caused the noise.*

少年が何人か外で遊んでいるために物音がしていたのだ。

→ 先行詞は *some boys* で複数形なのに、動詞が単数形の *was* になるのは、〈先行詞＋擬似關係節〉がひとつの出来事を表すためである。

(4) Sandfeld や古川が言うように、〈先行詞＋擬似關係節〉が文と同じ内容を表すとすると、次のような疑問が生じる。

- ① 〈先行詞＋擬似関係節〉は大きな名詞句である。名詞句なのになぜ文と同じ意味内容を表すことができるのだろうか。
- ② 〈先行詞＋擬似関係節〉はどのようなメカニズムによって文と同じ意味を表すのだろうか。
- ③ たとえば「なぜ店が閉まっているのか」という疑問に、(Parce que) Charles se marie. 「シャルルが結婚するのだ(するからだよ)」のように、ふつうの〈主語＋動詞〉の文を使って答えることもできるのに、わざわざ Il y a Charles qui se marie. のような擬似関係節を使って答えるのはなぜだろうか。そこにどのような文法的、語用論的動機があるのだろうか。

以下、この問題について順番に考えてみよう。

### 5.1. 古川 (1992) 説

(5) ここからの議論を理解するためには、文の二大様態としての「単一判断」と「二重判断」という用語を知らなくてはならない。

カリフォルニア大学サン・ディエゴ校で教授を勤めた黒田成幸(くろだ しげゆき)は、ヨーロッパの伝統的な文の構造が「主語・述語」一本槍であることを批判して、「単一判断」「二重判断」という区別を提案した。

#### a. 二重判断 (Categorical judgment)

「犬は走っている」や「クジラは哺乳動物である」のように、確立された主題があり、それについて何かを述べる文をいう。談話文法の「主題—解説」(topic-comment / thème-rhème) 構造に相当する。日本語学では有題文と呼ぶ。

#### b. 単一判断 (Thetic judgment)

「犬が走っている」「雨が降った」のように、主題を持たず、文全体としてひとつの出来事を表す文をさす。談話文法では文全体が解説 (comment / rhème) の文に相当する。日本語学では無題文、もしくは現象文と呼ぶ。

(Kuroda, S.-Y., “The categorical and the thetic judgment”, *Foundations of Language* 9, 1972)

#### 【解説】

ヨーロッパの伝統的言語学(論理学)では、「主語—述語」(sujet — prédicat) が文の基本構造とされている。これはアリストテレス以来の伝統である。しかしこの構造だけでは次のような文のちがいを捉えることができない。

#### a. Que fait votre frère dans la vie ? — Mon frère est professeur de latin.

「お兄さんは何をしておられますか」「兄はラテン語の教師です」

#### b. Qu'est-ce qui se passe ? — Un chien court dans la cour.

「どうしたのですか」「犬が校庭を走っている」

Mon frère est professeur de latin. は Mon frère を主題とする文である。Mon frère は先行文脈で votre frère として登場済で、話し手も聞き手も指示対象を了解している旧情報である。旧情報の主題について解説 (comment / rhème) が新情報を表している。

[Mon frère] [est professeur de latin]

**Thème Rhème**

一方、Un chien court dans la cour.には主題がない。un chien は不定名詞句で初めて登場した指示対象なので、主題になることができない。文全体が解説 (comment / rhème) であり、全体が新情報である出来事を表す。

[Un chien court dans la cour]

**Rhème**

日本語にはこの区別を表す文法的手段がある。助詞の「は」と「が」である。有題文の主題は「は」を用いて表す。

クジラは哺乳動物だ。

地球は丸い。

無題文には「が」を用いる。

風が吹いている。

足が痛い。

(6) 古川 (1992) は〈先行詞＋擬似関係節〉が文的内容を表すメカニズムを以下のように説明している。

「つぎの二つの例を見てみよう。

(17) a. Le facteur passe.

b. Le facteur qui passe.

(17 a)は、単一判断か二重判断かについて原理的にあいまいである。まず、おそらく意味的に優先的な単一判断の読みは、「郵便屋さんがやってきた」という一つの事態を報告する文の読みであり、もう一つの二重判断の読みは、「郵便屋さんはどうしたか」と言えば、「やってきた」という、「郵便屋さん」について語る文の読みである。これにたいして (17 b) は、単一判断の読みしかない。いいかえれば低主題性の名詞句をもつ発話である。

(17 b) における Le facteur の低主題性は、関係節中の動詞 passe の叙述性 (prédicativité) の低さに由来している。(…) 関係代名詞 qui をもたない、二重判断の読みとしての (17 a) の意味構造は、主題性と叙述性がいわば同じ重さで均衡している構造である。このことは、主題性と叙述性をそれぞれどちらも大文字の T と P で表した (18) のような図式によって示すことができる。

(18) Le facteur passe. = T—P

つぎに、関係代名詞 qui が動詞 passe の前にある場合を考えると、主題性と叙述性の関係は、(19) のような図式によって示される関係に変化する。

(19) Le facteur qui passe. = T—p

なぜなら、従属節化の標識である関係代名詞 qui は、統辞的に passe という要素を主節の要素から従属節の要素にレベルを下げることによって、意味的に叙述性のレベルを下げる働きをしているからである。その結果、主題性と叙述性の関係は、主題性は大文字の T、叙述性は小文字の p で表されうる、不均衡な関係にな

っている。(…) 結果として、つぎの図式における小文字の t が示すように、名詞句 *Le facteur* の主題性は、大文字の T で表される過渡的な状態から、小文字の p に対応する小文字の t の状態へと低下するのである。

(20) *Le facteur qui passe.* = t—p ] (古川 1992 : 6-7)

【解説と考察】

古川の議論には次のような前提が含まれている。

① *Le facteur passe.* のようなふつうの〔主語—述語〕構文は、原理的に二重判断（有題文）と単一判断（無題文）の二つの解釈ができる。

a. 単一判断の解釈

*Qu'est-ce qu'il y a ? — Le facteur passe.*

「どうしたの」「郵便屋さんが通る」

b. 二重判断の解釈

*Est-ce que le facteur est déjà passé ? — Oui, justement, le facteur passe.*

「郵便屋さんはもう来たの」「うん、郵便屋さんはまさに通り過ぎるところだ」

つまりフランス語の〔主語—述語〕構文は、有題文と無題文の対立については中立的である。主語は無標の主題であるが、主題とならないことも可能である。有標の主題を立てるときは次のような転位構文 (*dislocation / détachement*) を用いる。

c. *Le facteur, il est passé.* 郵便屋さんなら通りましたよ。

② 二重判断（有題文）の主語は主題性が高くなくてはならない。一般に主題性が高い名詞句は、総称名詞句 (ex. *la baleine, les baleines*)、先行文脈で登場済みの定名詞句 (ex. *un garçon* → *le garçon*)、照応的代名詞 (ex. *il, elle, le, la*)、指示形容詞・所有形容詞付き名詞 (ex. *ce livre, ma voiture*) などである。主題性が低い名詞句は、まだ話題に出ていない不定冠詞・部分冠詞付き名詞が代表的である。

主題性の高い名詞句にはさまざまな述語を使うことができる。

a. *La baleine est un mammifère.* [分類的述語]

クジラは哺乳動物だ。

b. *Ma voiture est tombée en panne.* [出来事を表す動詞]

私の車は故障した。

c. *Mon voisin est myope.* [恒常的性質を表す形容詞]

私のお隣さんは近眼だ。

主題性の低い名詞句には使える述語に制約がある。

d. *\*Une baleine est un mammifère.* [分類的名詞]

あるクジラは哺乳動物だ。

e. *Une voiture est rentrée dans un arbre.* [出来事を表す動詞]

一台の車が立木にぶつかった。

f. *??Un collègue est myope.* [恒常的性質を表す形容詞]

一人の同僚が近眼だ。

③ 単一判断（無題文）の主語は主題性が低い。単一判断の典型である突発的出来事を表す出来事文には、不定冠詞付きの名詞が使われることが多い。

a. *Mon Dieu ! Un chien a été écrasé pas un camion !*

何てこと！犬がトラックに轢かれた！

ただし、主題性の高い名詞句が単一判断文の主語となることもある。

b. *Zut ! Mon chien s'est sauvé.*

しまった。うちの犬が逃げ出した。

(7) 古川説には次のような問題点を指摘することができる。

① 古川説では主題性 (*thématicité*) と並ぶ重要な概念として叙述性 (*prédicativité*) という用語が使われているが、それが何を意味するか説明がない。古川の言う叙述性とは、おそらく述語として働き、主語について何かを断定する力であろう。国語学で言う「用言」の性質に近い。次は用言の定義である。

自立語のうち、体言にたいして、活用があり、何らかの事物について、その動作・存在・性質・状態を叙述する働きを持つもの。(小学館『日本国語大辞典』)

② *passé* が主節の動詞から従属節の動詞へと格下げされることによって叙述性が下がるというのは理解できる。主節の動詞に較べて、関係節の動詞は制限節の場合、断定の力があるとは言いがたいからである。(非制限節の動詞はその限りではない) しながら、動詞の叙述性の低下と釣り合いを取るように、主語の主題性も低くならなくてはならないという根拠はどこにあるのか不明である。たとえば次の文では、主語は主題性が低く、述語は叙述性が高い。古川の図式では *t—P* となるが、特に問題なく文として成立している。ならば *T—p* も問題ないのではないか。

i) *Une mouche s'est posée sur la table.*

蠅が一匹テーブルにとまった。

③ 古川は *Le facteur passé.* と *Le facteur qui passe.* とを比較しているが、むしろ *Il y a le facteur qui passe.* と比較すべきであった。そうすれば、主語の主題性と述語の叙述性の釣り合いを持ち出さなくとも、*le facteur* の主題性が低くなっていることは明白である。

a. *Le facteur passé.* 郵便屋さんは通っている。

**Thème Rhème**

二重判断の読みするとき、この文の主語 *Le facteur* は主題である。主語は無標の主題となれるからである。

b. *Il y a le facteur qui passe.* 郵便屋さんが通る。

この文では *le facteur* は主語位置から外されて、直接目的補語となっている。これは脱主題化 (*déthématisation*) の操作であり、何かの存在を述べる提示文 (*phrase présentative*) でよく起きることが知られている。元の主語が直接目的補語に変わると平行して、元の主節動詞は関係節の動詞へと形を変えらる。

古川説では、主節動詞が関係節に格下げになったことが *le facteur* の主題性の低下の原因であるかのように説明されているが、それはちがうのではないだろうか。*le facteur* の主題性の低下と主節動詞の関係節への格下げは、同時に起きる現象と見なすべきである。

## 5.2. Sasse (1987) の脱主語化説

(8) Sasse (1987) は、フランス語のふつうの [主語—述語] 構文とは異なる構造を持つ次のような文を「分離構文」(split structure) と呼ぶ。Sandfeld が属詞的關係節としてあげた構文と同じものである。

a. 〈Il y a... qui〉 構文

Maman, il y a ma poupée qui s'est cassée.

ママ、お人形が壊れちゃった。

b. 〈C'est...qui〉 構文

Ça ne va pas ? — Laisse. Ne vous occupez pas de moi. C'est ma mère qui est morte

「具合でも悪いのですか」「ほっておいて。私のことをかまわないでください。母が死んだのです」

c. 〈J'ai ... qui〉 構文

J'ai mon gosse qui est malade.

子供が病気なんだ。

d. 〈Voilà... qui〉 構文

Voilà la sirène qui hurle.

ほら、サイレンが鳴っている。

e. 〈名詞句+qui...〉 構文

Que se passe-t-il ? — Le chat qui est tombé par la fenêtre.

「どうしたの」「ネコが窓から落ちたんだ」

f. 〈Et+名詞句+qui...〉 構文

Nous avons une invitation ce soir ; et ma femme qui est malade !

今夜はお客様に呼ばれているのに、家内が体の具合が悪いと来た。

(9) Sasse はなぜこのような構文が存在するのかを説明するために、文とは何かという問題に立ち戻って考えている。Sasse の説明で重要な概念は *predication base* 「叙述の基盤」である。これは文の主語をさしているが、主語という用語には問題があるので *predication base* と呼ぶとしている。

An entity to which a property is ascribed will henceforth be called the *predication base*.  
 (...) Any sentence that expresses a predication must have a predication base: it must refer to an entity. (...) At any rate it is important for the sentence which makes the predication always to contain a slot, filled or not, for a referential element which is the predication base.

If the utterance lacks a predication base the state of affairs is simply posited ('recognized', as Marty would say). An entity that may happen to be involved in the state of affairs so asserted may not be picked out as the predication base but is presented as part of the event; hence it need not be expressed by a referential element. While an entity serving as a predication base is always autonomous, that is, independent of and OUTSIDE the predicated event — this must be so since the event is presented as its property — an entity involved in a simple 'recognition' is INSIDE the event and may not be conceived as an entity at all.  
 (Sasse 1987 : 555)

[文において] 属性が付与される対象を、以後「叙述の基盤」と呼ぶ。(…) 叙述を行なうあらゆる文には叙述の基盤が必要である。叙述の基盤は対象を指さなくてはならない。(…) いずれにしても叙述を行なう文にとって、常にひとつの場所を確保することが重要であり、その場所は[具体的な要素によって]埋まられていてもいなくても、叙述の基盤となる指示的要素が入る場所である。

もし文に叙述の基盤となるものがなければ、[文が表す] 事態は単に差し出されただけのものとなる(マルティなら「認識された」と言うだろう)。そのように断定された事態に含まれる対象は、[事態から]叙述の基盤として取り出されるのではなく、出来事の一部として提示される。このためその対象は指示的要素によって表される必要はない。叙述の基盤となる対象は常に自立的である。つまり述べられた出来事から独立しており、「外部に」ある。出来事は叙述の基盤に付与される属性なので、そうでなくてはならない。単に「認識」されるだけの出来事に含まれる対象は、出来事の「内部に」あり、対象と見なされる必要すらないこともある。

N. B. Anton Marty (1847-1914): スイス生まれの言語哲学者。黒田成幸がその考えを発展させて二重判断・単一判断という概念を提唱した。

#### 【解説】

Sasse が predication base と呼んでいるのは実質的には主語・主題と同じものなので、以下ではそう呼ぶ。一般に文とは「何かについて何かを述べる」ものである。

a. *La Terre est ronde.* 地球は丸い。

→「地球」について「丸い」という属性を述べている。

b. *Mon frère travaille chez Renault.* 兄はルノーに勤めている。

→「話し手の兄」について「ルノーの社員である」という属性を述べている。

「何かについて」の「何か」が predication base であり、ふつうは主語・主題である。この「何かについて」「何かを述べる」という二段階の構造を Sasse は bipartite structure 「二分構造」と呼ぶ。黒田成幸の「二重判断」(categorical judgment) と同じである。

叙述の基盤となる「何か」は、その文の叙述とは独立して存在しなくてはならない。

a. の「地球」は、丸いと考えられようが平らと見なされようが、変わらず存在する。

b. の「兄」はルノー社の社員だろうが、トヨタの社員だろうが、それとは関係なく存在する。つまり叙述の基盤つまり主題は、文の叙述とは独立して、特定の人・物を指さなくてはならない。その証拠に、文を否定しても叙述の基盤は変わらず存在する。

c. *La Terre n'est pas ronde.* 地球は丸くない。

d. *Ce n'est pas vrai que la Terre soit ronde.* 地球が丸いというのは正しくない。

一方、出来事文はこれとは異なる構造を持つと Sasse は考えている。二重判断で「雪は白い」と言うとき、「雪」という対象に「白い」という属性を付与するのは、話し手の判断による断定である。他人が「いやいや、雪は白くなんかないよ。都会では汚れていて灰色だよ」と別の判断を出すこともできる。これにたいして *Regarde ! Un cerf traverse le passage piéton !* 「見て。鹿が横断歩道を渡ってるよ」という出来事文では、話し手は認識した事態をそのまま述べているので、何かについて何らかの判断を下しているわけではない。「鹿が横断歩道を渡っている」という事態は、単に提示されてい

る (simply posited) に留まる。このように単一判断では「何かについて何かを述べる」という二分構造がない。

また出来事を表す単一判断文では、叙述に含まれる対象のあり方も異なることが重要である。対象は二重判断文のように出来事と独立して存在するのではなく、出来事の一部として含まれる。その証拠に次のように否定すると、対象である横断歩道を渡る鹿は存在しなくなる。

e. Ce n'est pas vrai qu'un cerf traverse le passage piéton.

鹿が横断歩道を渡っているというのは正しくない。

極端な場合、出来事文には対象が含まれないことさえある。天候表現がそうである。

f. Il pleut. 雨が降っている。

(10) [Il est arrivé de bonnes nouvelles. 「よい知らせが届いた」のような非人称構文について]

This type of construction, which is extremely frequent particularly in earlier stages of Romance and Germanic languages, is unlikely not to be the outcome of some functional principle. I have drawn the conclusion (see Sasse 1982 : 282) that the goal of depriving subjects and predicates of their grammatical characteristics is 'desubjectivization': the constituent of the sentence potentially interpretable as the subject is marked so as to preclude such an interpretation. (Sasse 1987 : 534)

このタイプの構文は、特にロマンス語やゲルマン語の初期段階によく見られるものであるが、何らかの機能的原理の結果であることはまちがいない。私は別の論文で、主語や述語からその文法的特性を奪う目的は「脱主語化」であるという結論を導いた。脱主語化とは、文中で主語と解釈しうる構成素を、主語と解釈できなくするようにマークする操作である。

### 【解説】

Sasse の言う「脱主語化」とは、本来ならば主語の位置を占める要素を、主語の位置から外す操作である。フランス語では次のような構文に見られる。

#### a. 倒置構文

i) L'odeur du bois brûlé flottait dans la maison. [正置]

焦げた木材の臭いが (は) 家の中に漂っていた。

→ 文脈によっては、主語 L'odeur du bois brûlé が主題での二重判断文 (有題文) と解釈することもできる。

ii) Dans la maison flottait l'odeur du bois brûlé. [倒置]

家の中には焦げた木材の臭いが漂っていた。

→ L'odeur du bois brûlé は倒置によって主語・主題の位置から外されていて、出来事文 (無題文) となっている。

#### b. 非人称構文

i) Le dernier tome manque. [人称的主語]

最後の巻が (は) 欠けている。

→ Le dernier tome は主語であり主題でもあると見なせば二重判断文になる。

ii) Il manque le dernier tome. [非人称構文]

最後の巻が欠けている。

→ *le dernier tome* は主語の位置から外されていて主題ではなくなっている。

Sasse は (8) の a.~f.に挙げた擬似関係節構文にも、同じように脱主語化が働いていると考えている。

c. *Charles se marie.*

シャルルが (は) 結婚する。

→ *Il y a Charles qui se marie.*

シャルルが結婚するんだよ。

d. *Le mari montait.*

夫が (は) 上に上がって来ていた。

→ *C'était le mari qui montait.*

それは夫が上に上がって来ていたのだ。

c.では元の文の主語が *il y a* の右に移動して直接目的補語になっている。d.では元の主語は *être* の右に移動して属詞となっている。このように Sasse が *split structure* と呼ぶ擬似関係節構文は、本来ならば主語に置かれる要素を主語位置から外すことによって、「主題—解説」(*thème—rhème*) 解釈を避けて単一判断文(無題文)に変えるための文法的手段だと考えることができる。

(11) A subject which is in the accusative or occurs as a predicate of a copular construction is not a subject, and a predicate attributed to such a 'subject' in the form of a participle or a relative clause is not a predicate.

In short, split structures are a special method of putting the 'predicate' in an attributive relation to its potential subject. The exocentric construction of the subject-predicate relation is changed into an endocentric noun-attribute relation, the two-unit structures of the predicative sentence becomes a one-unit structure, which itself can be made assertive by adding an element with an assertive character such as a copula or an existential marker.

(Sasse 1987 : 562-3)

対格 (=直接目的語) に置かれたり、コピュラの属詞となった主語はもはや主語ではない。このような「主語」に分詞や関係節の形を取って付与される述語もまたもはや述語ではない。

要するに分離構造は、本来なら主語になる要素と「述語」とを、[主述関係ではなく] 名詞句と修飾語句の関係にするのである。こうして主述関係という外心構造は、名詞句—属性という内心構造へと変換される。二つの要素から成る主述関係を持つ構造は、ひとつの要素でできた構造へと変わる。こうしてできた構造が断定の力を持つのは、コピュラや存在マーカという断定能力がある要素が付加されることによる。

【解説】

主語と述語から成る文は外心構造を持つと言われる。「何かについて」「何かを述べる」という二分構造を取っているからである。

**Ma poupée** **est cassée.** 人形は壊れている。

主語

述語

**Thème**

**Rhème**

これにたいして、擬似関係節構文は〔先行詞＋修飾句〕という単一構造を取る。

**Il y a ma poupée qui est cassée.** お人形が壊れちゃった。

[存在マーカー] [名詞句＋修飾句]

このように「主語—述語」という二分構造が「名詞句＋修飾句」という単一構造に格下げされることによって単一判断を表すようになるというのが Sasse の考えである。

## (12) まとめ

第 5 章の最初に、擬似関係節について次のような疑問を提示した。

- ① 〈先行詞＋擬似関係節〉は大きな名詞句である。名詞句なのになぜ文と同じ意味内容を表すことができるのだろうか。
- ② 〈先行詞＋擬似関係節〉はどのようなメカニズムによって文と同じ意味を表すのだろうか。

この二つの疑問にはこれまでの考察で部分的に答えることができる。

*C'est ma mère qui est morte.* 「母が亡くなったのだ」、*Il y a Charles qui se marie.* 「シャルルが結婚するんだよ」のような擬似関係節構文は、次のようなメカニズムによって文的内容を表すと考えられる。

- (A) ふつうの主語・述語構造なら主語となる要素を主語位置から外して、直接目的補語や属詞位置に置く。これによって〔主題—解説〕構造 (*thème—rhème*) がなくなり、元の主語の主題性が低下する。
- (B) これと同時に元の述語は、主題性が低下した元の主語の属詞となる。
- (C) 主題性が低下することにより、元の主語は独立した対象としての資格を失い、擬似関係節構文が表す出来事の一部として含まれる。
- (D) 元の〔主語—述語〕構造 (*Charles se marie.*) は、〔名詞句—属詞〕構造 (*Charles qui se marie*) に変わる。
- (E) 本来ならば〔名詞句—属詞〕構造は文と同じ意味内容を表すことはできないが、付加された存在マーカー (*il y a, voilà*) やコピュラ (*C'est*) の力によって文と同じ意味内容を表す。

## (13) Sasse 説への疑問

Sasse は上の (11) の引用の中で、分離構文の形を取ることで〔主語—述語〕(*subject—predicate*) という遠心構造 (*exocentric structure*) が〔名詞—属詞〕(*noun—attribute*) という内心構造 (*endocentric structure*) に変わると述べている。内心構造とは、名詞 (*fleur*) に形容詞 (*joli*) を付加したときに、*une jolie fleur* のように元の名詞のままである構造をいう。

しかし〔名詞—属詞〕は〔名詞—形容詞〕のような内心構造ではない。

a. *Je ne l'ai jamais vu fatigué de nager.*

私は彼が泳ぎ疲れるのを見たことがない。

*fatigué de nager* は直接目的補語の代名詞 *le* の属詞である。*le* と *fatigué de nager* の関係は〔名詞—形容詞〕のような関係ではない。伝統文法では *voir* は繫合動詞 (*verbe copule*) として働き、*le* と *fatigué de nager* を結ぶとされている (*Il EST fatigué de nager*)。したがってここには「彼は疲れている」という〔主語—述語〕関係が内在しているので、

単なる内心構造とするのは誤りである。

## 6. 単一判断文に含まれる指示対象の様態

(1) Sasse は既に見た引用の中で、二重判断の対象となるものは叙述から独立して存在するが、単一判断に含まれる対象は出来事の内部に含まれると述べていた。

An entity that may happen to be involved in the state of affairs so asserted may not be picked out as the predication base but is presented as part of the event; hence it need not be expressed by a referential element. While an entity serving as a predication base is always autonomous, that is, independent of and OUTSIDE the predicated event — this must be so since the event is presented as its property — an entity involved in a simple ‘recognition’ is INSIDE the event and may not be conceived as an entity at all. (Sasse 1987 : 555)

そのように断定された事態に含まれる対象は、[事態から] 叙述の基盤として取り出されるのではなく、出来事の一部として提示される。このためその対象は指示的要素によって表される必要はない。[主語+述語という二重判断の] 叙述の基盤となる対象は常に自立的である。つまり述べられた出来事から独立しており、「外部に」ある。出来事は属性として叙述の基盤に付与されるので、そうでなくてはならない。[これにたいして] 単に「認識」されるだけの出来事に含まれる対象は、出来事の「内部に」あり、対象と見なされる必要すらないこともある。

### 【解説と疑問】

[主語+述語] 構造の二重判断文では、判断の対象 (=Ma poupée) は出来事から独立していて、出来事の外部にあるという。

a. *Ma poupée est cassée.* 私の人形は壊れている。

一方、次のような単一判断文では、対象 (=ma poupée) は自立的ではなく、出来事に含まれているという。

b. *Maman ! Il y a ma poupée qui est cassée.* ママ。お人形が壊れちゃった。

a. では *Ma poupée* は主語・主題に位置に置かれており、b. では *ma poupée* は直接目的補語の位置に置かれている。しかしそのような文法的なちがいで、対象が出来事から独立しているか、それとも出来事に含まれているかというちがいは説明できない。もっと別のレベルの考察が必要である。そもそも「出来事の内部に含まれている」というのはどういう意味だろうか。

(2) ヨーロッパの言語学では、アリストテレス以来の[主語+述語] (*sujet—prédicat*) 一本槍なのにたいして、日本語学では「文の種類」がさかんに論じられてきた。日本語は助詞 (ハ、ガ、ニ、*etc.*) と助動詞 (ダ、ノダ、ダロウ、*etc.*) を多用するために文のタイプがヨーロッパの言語よりたくさんあるからである。日本語学の知見をもとにしてヨーロッパの言語学を見直してみると、そこに足りないものがよく見えて来ることがある。少し寄り道して、日本語学で文の種類がどのように考えられて来たかを見よう。

(3) 叙述の種類としては、「属性叙述」と「事象叙述」が区別される。属性叙述とは、ある対象が有する何らかの属性を表現するものであり、事象叙述とは、特定の時空間に存在・生起する事象を表現するものである。(…)

(31) 太郎は音楽が好きだ。

(32) 花子が神戸に来た。

このうち、属性叙述文は、真偽判断文の典型であると言うことができよう。属性叙述文においては、属性だけを単独で述べることは無意味であり、必ず、ある対象の存在が要請される。ある対象とある属性の結びつきが主張されるのである。そして、対象と属性の結合には真偽判断が関与する。属性叙述文は真偽判断のモダリティを有するわけである。(…) このように、属性叙述文は、判断の対象、対象に関する叙述、真偽判断のモダリティという 3 要素を持つ。その表現形式の基本は、「主題(〜ハ) + 属性の表現 + 真偽判断のモダリティ」となる。(…)

事象叙述文が属性叙述文と大きく異なるのは、無題文が存在する点である。前節で挙げた (32) は無題の事象叙述文である。この種の文は、判断の対象を置かないで、事象の叙述だけを行う文である。ある時空間において存在、生起が確定した事象を描くだけの文である。(…) このような性格の文が存在することは三尾 (1948)、佐治 (1973)、久野 (1973)、仁田 (1986, 1989b) 等によって指摘されてきた。すなわち三尾の「現象文」、佐治の「存現文」、久野の「中立叙述文」、仁田の「現象描写文」である。

(…) 単純事象叙述文に関する最も基本的な性格は、問題の事象が、表現者が客観的に観察できる性格のものであり、したがって、事象の存在・生起が確定したものでなければならない、ということである。このタイプの文の典型例は、次に示すような、客観的に捉えられる事象—とりわけ、無意志的事象—の存在と発生である。

(49) 雨が降っている。

(50) ベルが鳴った。

(…) 単純事象叙述文のもう一つの重要な特徴は、前節で述べたように、事象の主体(ガ格で表されるもの)の存在が事象に依存するという点である。次の例を比較してみよう。(下線は東郷による)

(59) 花子がテレビのスイッチを入れた。

(60) 花子はテレビのスイッチを入れた。

(…) (59)では、「花子」は、事象の叙述を構成する一つの要素であるに過ぎない。事象の主体としての役割が問題にされているだけである。そこで、この場合、「花子」の代わりに「誰か」のような表現を用いても問題はない。主体に関する情報量が減少するだけのことである。

(61) 誰かがテレビのスイッチを入れた。

これに対して、(60)では、「花子」の存在は、事象の叙述に依存してはいない。(59)の「花子」が、言わば、事象の叙述の中でその存在が認められるとでも言うべき性格のものであるのに対して、(60)の「花子」は、事象の叙述とは独立にその存在が認められている。(下線は東郷による)(…) 主題全般に認められるこのような特徴を、本書で「主題の所与性」と呼ぶことにする。

(益岡隆志『モダリティの文法』、くろしお出版、1991 : 131-134)

## 【解説】

益岡が提案する文の類型は次のようになっている。

(A) 属性叙述文 (有題文)

太郎は音楽が好きだ。

(B) 事象叙述文

(B-1) 単純事象叙述文 (無題文)

雨が降っている。

花子がテレビのスイッチを入れた。

(B-2) 有題の事象叙述文

花子はテレビのスイッチを入れた。

このうち (B-2) の有題の事象叙述文はここでは考える必要はないので、(A)の属性叙述文と (B-1) の単純事象叙述文を比較して考える。益岡は次のように述べている。

[属性叙述文]

- a. 主題を持つ有題文である。(= [thème—rhème] 構造を持つ)
- b. 基本形式は「～ハ+属性」のように、助詞ハを用いる。
- c. 真偽判断の対象となる。
- d. 主題の指示対象は叙述とは独立して存在する。

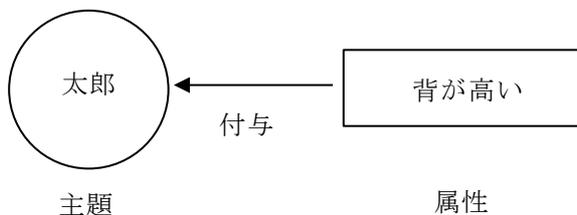
[単純事象叙述文]

- a. 主題を持たない無題文である。(=文全体が rhème である)
- b. 基本形式は「～ガ+出来事」であり、助詞ガを用いる。
- c. 真偽判断の対象とならない。話し手が観察できる確定した出来事を、主観を交えずに客観的に述べているからである。
- d. 出来事に含まれる対象 (ガ格の名詞句) は出来事に依存し、その中で存在が認められる。

図式で表すと次のようになる。

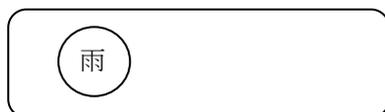
[属性叙述文]

太郎は背が高い。



[単純事象叙述文]

雨が降っている。



出来事

(4) 益岡の言う事象叙述文 (= 現象文) の特性は、ここで検討している擬似関係節構文のうち、次のものに当てはまると考えられる。

a. 〈Il y a + 名詞句 + qui〉 構文

Maman, il y a ma poupée qui est cassée.

ママ、お人形が壊れちゃった。

b. 〈J'ai + 名詞句 + qui〉 構文

Tu as le nez qui coule.

君、涙が垂れてるよ。

c. 〈Voilà + 名詞句 + qui〉 構文

Voilà la sirène qui hurle.

ほら、サイレンが鳴っている。

d. 〈名詞句 + qui〉 構文

Le vase qui tombe !

花瓶が倒れる！

これらはいずれも主題を持たない無題文であり、少なくとも b. c. d. は話し手が起きたこと（起きようとしていること）を観察し、それを事実として客観的に述べたものである。ただし a. は何らかの状況（例文では Maman ! と母親を呼んだこと）を「説明」している点で、事象叙述文とやや異なる面がある。

また次の構文は、益岡の挙げる事象叙述文と似ている点はあるものの、異なる部分も大きい。

e. 〈C'est + 名詞句 + qui / que 〉 構文

Qu'est-ce que c'est que ce bruit ? — C'est des enfants qui jouent dans le jardin.

「あの物音は何ですか」「子供たちが庭で遊んでいるのです」

f. 〈Et + 名詞句・代名詞 + qui〉 構文

Le taxi attend en bas, et moi qui ne suis pas encore prêt !

タクシーが下で待っているというのに、私はまだ仕度が出来ていない。

e. では C'est 構文が物音の正体を同定していて、ce bruit = ce という主題があり、益岡の用語では主題を持つ事象叙述文である。また f. は単に事実だけを述べているのではなく、「仕度が出来ているべきなのに、まだ出来ていない」という対立的事態を述べているので、単なる事象叙述文ではない。

〈先行詞 + 擬似関係節〉という構造自体は、出来事を表す事象叙述文 (= 無題文、現象文) を基本的な意味とする文的意味を表すのだが、〈先行詞 + 擬似関係節〉の前にある C'est / Il y a / J'ai / Voilà などの断定を担う語句がそれぞれ異なる働きをするために、このようなばらつきが出るものと考えられる。

(5) 益岡によると、事象叙述文は、話し手が観察でき、存在・生起が確定した事象を客観的に述べるものであり、真偽判断のモダリティを持たないとされている。事象叙

述文が持つこのような特性によって、擬似関係節構文の次のような性質をうまく説明することができる。

① 擬似関係節構文の多くは否定・疑問といった主節のモダリティ操作ができない。

a. *Il y a le chien qui arrive.*

犬がやって来た。

b. *\*Il n'y a pas le chien qui arrive.*

犬がやって来ていない。

c. *\*Y a-t-il le chien qui arrive ?*

犬がやって来ていますか。 (以上 Léard, J. M., *Les gallicismes*, Duculot, 1992)

d. *{Il y a / J'ai} ma femme qui m'attend impatientement.*

家内がじりじりしながら私を待っているんだ。

e. *\*{Il n'y a pas / Je n'ai pas} ma femme qui m'attend impatientement.*

家内がじりじりしながら私を待っていない。

f. *Je vois Marie qui parle avec son frère.*

マリーがお兄さんと話しているのが見える。

g. *\*Je ne vois pas Marie qui parle avec son frère.*

マリーがお兄さんと話しているが見えない。 (以上 Kaneko 1996)

h. *?L'as-tu réellement vu qui volait le courrier dans les boîtes aux lettres ?*

君はほんとうに彼が郵便受けから手紙を盗むのを見たのですか。 (Muller 1995)

i. *\*Entends Pierre qui chante !*

ピエールが歌うのを聞いてみろよ。

h *\*Est-ce que Paul l'a vu qui pleurait ?*

ポールは彼が泣いているのを見たのですか。 (以上 Kleiber 1988)

佐治 (1973) は、益岡が事象叙述文と呼ぶ文タイプを「存現文」と呼ぶ。

a. 山がある。

b. 雨が降っている。

c. 犬が猫を追っかけている。

そして佐治は、存現文は、否定文・疑問文・命令文にはできないとしている。

「否定や意志や命令や疑問の表現も、文を題述文 (=主題文) にしてしまうようである。とにかく存現文は、事物、現象の存在を直感的に把握するものだから、確言の肯定の平叙文でしかありえないのである。」

(佐治圭三「題述文と存現文 — 主語・主格・主題・叙述(部)などに関して」  
『大阪外国語大学学報』29、1993)

② 擬似関係節構文は、話し手が目にした一度きりの出来事を客観的に述べるものである。このため主観的判断を表す副詞や、*toujours*、*souvent* など習慣的事態を表す副詞や、*trois fois* のように頻度を表す表現を用いることができない。また条件法にすることもできない。

a. *?{J'ai / Il y a} toujours ma femme qui m'attend impatientement.*

家内がいつもじりじりしながら私を待っているんだ。 (Kaneko 1996)

b. \*Je l'ai souvent vu qui allait au cinéma.  
私は彼が映画に行くのをしばしば目にした。

c. \*Tout les jours, je le vois qui prends le bus.  
毎日私は彼がバスに乗るのを見ている。

d. \*Je l'ai trois fois vu qui allait au cinéma.  
私は彼が映画に行くのを 3 回見た。

e. \*Si je l'avais vu qui pleurait, je l'aurais consolé.  
もし彼が泣いているのを見たとしたら、慰めてあげるだろうに。

(以上 Kleiber 1988)

f. \*Je vois malheureusement Marie qui pleure.  
残念なことにマリーが泣いているのが見える。

(Cadiot 1976)

このように、擬似関係節構文は事象叙述文 (= 現象文) であるために、現実起きた 1 度きりの出来事を表す。これを「事実性制約」、「一回性制約」と呼ぶ。

③ 擬似関係節構文は、出来事の存在・生起に気づいた話し手が、その存在・生起を述べるものである。このため関係節の述語は時間の中で生起する出来事を表すものでなくてはならない。恒常的状态や属性を表す述語は用いることができない。

a. Qu'est-ce qui se passe ? — Il y a le sac { qui est troué / \*qui est pratique }.  
「どうしたの」「かばんに穴があいてしまった / \*かばんが便利だ」

(Léard, J. M., *Les gallicismes*, Duculot, 1992)

b. \*Je le vois { qui est intelligent / qui a honte / apprécie le bon vin / mesure 1m70 }.  
私には彼が { 頭がいいのが / 恥ずかしがっているのが / 美味しいワインが好きなのが / 身長が 1m70 なのが } 見える。

(Cadiot 1976)

c. \*Il est là qui est obèse maintenant.  
彼が今や太ってあそこにいる。

d. ??Il est là-bas qui s'appelle Jean.  
彼がジャンという名前であそこにいる。

e. \*J'ai vu Marie qui avait les cheveux longs.  
私はマリーが髪が長いを見た。

(以上 Radford 1975)

Rothenberg (1979)は、「属詞的關係節」(proposition relative attributive) と呼ぶ *Il est là qui pleure* 構文、*Ils sont nombreux qui pleurent* 構文、*Marie le voit qui pleure* 構文の關係節の動詞は「活動」(activité) を表すものでなくてはならないと指摘している。しかし、avoir faim, être fatigué, être couché などは許容されるとも述べている

f. *Il est là qui est couché*.  
彼があそこに横になっている。

g. *Ils sont nombreux qui ont faim*.  
大勢の人がお腹が減っている。

h. *Marie le voit qui est fatigué*.  
マリーには彼が疲れているのが見えた。

これらの表現は、時空間的に限定された一時的状態を表し、また話し手によって観

察可能である。この条件を満たせば状態を表す述語も容認されることがわかる。

また Hatcher (1994) は次のような例についておもしろいことを述べている。

- i. On en voyait [des poissons] des rangées, écorchés comme des lapins, qui pendaient tout rouges dans les haubans de misaine.

ウサギのように皮を剥がれて並べてある魚が、まっ赤な色をして船の前のマストの帆を支えるロープにぶら下げられているのが見えた。

- j. Jeanne apercevait, de son banc, les cimes de deux châtaigniers ... et, plus loin, le cèdre de la maison forestière, qui allongeaient ses palmes noires sur le bleu du ciel.

ジャンヌには坐っているベンチから 2 本の栗の木のとっぺんが見えた。少し離れた所には森小屋の杉の木が、青空を背景として黒い葉を拡げていた。

pendaient「ぶら下がっていた」、allongeaient「拡げていた」などは一見すると状態を表すように見えるが、これは実は crystallized movement「結晶化された動き」を表すとしている。(Hatcher 1994 : 395)

ただし、恒常的状态・属性を表すように見える例が、少数ながらもいわけではない。例は Rothenberg (1971) から。

- h. J'ai mon fils Etienne et ma fille qui connaissent bien l'écriture.

うちの息子のエティエンヌと娘は読み書きがよくできる。

- i. Moi, j'ai mon grand frère qui a toutes les décorations du monde.

僕のお兄さんは世界中のありとあらゆる勲章を集めている。

④ 制限的關係節の先行詞は、a.のように特定解釈の名詞句でも b.のように非特定解釈の名詞句でもよい。しかし擬似關係節の先行詞は特定解釈でなくてはならない。

- a. J'ai été insulté par un jeune homme que j'ai croisé dans le couloir.

私は廊下ですれちがった若者にののしられた。

→ un jeune homme はある特定の人物を指すので特定解釈 (spécifique) 。

- b. Je cherche une infirmière qui puisse travailler le week-end.

私は週末に勤務できる看護師を探している。

→ une infirmière は「だれでもいいから一人の看護師」で特定の人物を指していないので非特定解釈 (non-spécifique) 。

- c. Many people who dislike Carter voted for Kennedy. (Declerck 1981)

カーターを嫌う多くの人がケネディに投票した。

→ many people は弱限定詞で非特定解釈である。

- d. [昨日聞こえた物音を話題にして]

It was { a bomb /\*many bombs } that exploded. (Ibid.)

あれは {爆弾が /たくさんの爆弾が} 爆発したのだ。

→ a bomb は特定解釈できるので擬似關係節構文で許容される。many bombs は弱限定詞であるため特定解釈できないので不適格となる。

先行詞が特定解釈でなくてはならないのは、〈先行詞＋擬似關係節〉が現実起きた一度きりの出来事を表すという「事実性制約」によるものである。実際に起きた出来事に登場する人・物は特定解釈になる。次の文は動詞が過去形であり、すでに起きた

出来事を表すので *un chien noir* は特定解釈になる。

e. *Un chien noir est entrée dans la salle d'attente.*

黒い犬が一匹待合室に入ってきた。

⑤ 〈先行詞＋擬似関係節〉は次のように複数個を *and* で結んで連結できる。

a. *What was that noise ? — It was some children that were playing in the garden and some others that were singing aloud.* (Declerck 1981)

「あの音は何だったのですか」「あれは子ども達が庭で遊んでいて、また別の子どもたちが大声で歌っていたのです」

ところが *it was* を繰り返すと容認されない。

b. *What was that noise ? — \*It was some children that were playing in the garden and it was some others that were singing aloud.* (Ibid.)

「あの音は何だったのですか」「あれは子ども達が庭で遊んでいたのです。またあれは別の子どもたちが大声で歌っていたのです」

Declerck はこの事実を指摘しているだけだが、次のように説明できる。〈*It is ... that*〉構文（フランス語の *C'est...qui* 構文）は、先行文脈で述べられた出来事 (*that noise*) や、発話の場で起きた出来事（外で物音がした）の原因・正体を同定する働きがある。擬似関係節の「一回性制約」により、〈*It is ... that*〉はただひとつの出来事に対応する。a.のように *it was* を繰り返さずに連結すると、「ある子ども達が庭で遊んでいて、別の子ども達が大声で歌っている」のはひとつの出来事である。ところが *it was* を繰り返すと、「ある子ども達が庭で遊んでいる」と「別の子ども達が大声で歌っている」はふたつの別の出来事になってしまう。ひとつの *that noise* をふたつの出来事によって同定するのは矛盾する。だから容認されないのである。

## 7. 擬似関係節構文の時制の制約

ふつうの制限的關係節の中の動詞はさまざまな時制を取ることができる。

a. *C'est le vélo que { j'ai acheté / j'allais acheter / j'achète / j'achèterai }.*

これは私が {買った / 買うところだった / 買う / 買うつもり} 自転車だ。

また条件法や接続法にすることもできる。

b. *C'est le vélo que j'achèterais si j'avais un peu plus d'argent.*

これはもしもう少しお金があったら買う自転車だ。

c. *J'ai besoin d'un vélo qui soit plus robuste.*

もう少し頑丈な自転車が必要だ。

ところが擬似関係節構文には時制の制約があり、構文によって使える時制が限られている。これはなぜだろうか。時制の制約については多くの先行研究で指摘されているのだが、この制約は〈先行詞＋擬似関係節〉という構造に内在する制約ではないと考えられる。〈導入表現＋先行詞＋擬似関係節〉全体が果たしている談話的役割に由来するものである。ここで談話的役割と呼ぶのは、〈導入表現＋先行詞＋擬似関係節〉がどのような文脈・状況に適合した情報を提供するのかということである。以下、それぞれの構文について見て行こう。

(1) 〈C'est + 名詞句 + qui / que〉 構文

Rothenberg (1971) によれば、この構文で使えるのは現在形と半過去形だけだという。

a. C'est Trotte-Chemin qui *rentre* ! [現在形]

あれは Trotte-Chemin が帰って来たのだ。

b. Un pas se fit entendre, c'était le mari qui *montait*. [半過去形]

足音が聞こえてきた。夫が上に上がって来ていたのだ。

しかし複合過去の事例もある。

c. Laisse, lui dis-je. Ne vous occupez pas de moi. C'est ma mère qui *est morte*.

「ほっておいて」と私は言った。「私にかまわないで。母が死んだのです」

d. J'avertirai ton papa que tu musardes et il te grondera.

— Madame, c'est Poil de Carotte qui m'a dit d'attendre.

「お前がぶらぶらしているとお父さんに言いつけるよ。きっと叱られるだろう」

「にんじんが僕に待っているように言ったんです」

(朝倉季雄『フランス文法事典』、1955)

e. Pourquoi est-ce que tu pleures ? — C'est mon papa qui *m'a battu*.

「どうして泣いているんだい」「パパにぶたれたの」

(Lerch, E. *Historische französische Syntax* 3, 平塚 (1991) に引用)

また平塚 (1991) はインフォーマントによる作例テストで次の例文を可としている。

f. Qu'est-ce qui s'est passé ? — C'est François qui *est tombé* dans l'escalier.

「何があったのですか」「フランソワが階段から落ちたのです」

g. Qu'est-ce que c'est que ce bruit ? — C'est François qui *a laissé* la télé allumée.

「あの音は何ですか」「フランソワがテレビを付けっぱなしにしたのです」

だとすると次の大過去形も可能なはずである。

h. Un bruit se fit entendre. C'était François qui *était tombé* dans l'escalier. [作例]

物音がした。フランソワが階段から落ちたのだ。

しかし、未来形や条件法は許容されないと思われる。

i. \*C'est Jean qui *cassera* la vitre. [作例]

ジャンが窓ガラスを割るでしょう。

j. \*C'est Jean qui *défoncerait* la porte si besoin était. [作例]

必要ならジャンがドアをぶち破るだろうに。

Rothenberg (1971) はこの構文には次のような談話的機能があるとしている。

... le syntagme *La messe de minuit qui commence* introduit par C'EST, dans la construction sous rubrique, est un PRÉDICAT qui identifie le THÈME explicite ou implicite constitué par la situation. (Rothenberg 1971 : 105)

C'EST が導入する「深夜のミサが始まるのだ」という句は、この構文においては述語であり、状況に含まれた主題（はっきり述べられることも、暗黙のうちに含まれることもある）を同定する働きがある。

たとえば話し手と聞き手のいる発話現場で物音がしたとする。その物音の原因は、直前に起きた出来事 (ex. François est tombé dans l'escalier) か、今まさに起きている出

来事 (ex. *On nous abat des peupliers.*) である。遠い過去に起きた出来事や、未来に起きる出来事が発話の場に生じた物音の原因となることはない。このためにこの構文の時制は現在形か複合過去形になる。これが物語文で用いられると、時制の一致によって半過去形と大過去形になる。したがって、この構文の時制の制約は、「発話の場や先行文脈にある主題の原因・正体を同定する」という〈C'est+名詞句+qui / que〉構文の談話機能に由来すると考えられる。

(2) 〈Il y a+名詞句+ qui〉構文

Rothenberg (1971) によれば、この構文で可能な時制は現在形、近接未来形、複合過去形、半過去形、大過去形で、未来形は不可とされている。

a. *Il y a le chauffage qui ne marche pas.* [現在形]

暖房が故障しているのだ。

b. *Attention ! Il y a le vase qui va tomber !* [近接未来形]

気をつけて。花瓶が倒れるよ。

c. *Je ne peux pas venir. Il y a mon article que je n'ai pas terminé.* [複合過去形]

私に行けないよ。記事を書き上げていないのだ。

d. *Elle dut rentrer de bonne heure ; il y avait les Dupont qui venaient dîner.* [半過去形]

彼女は早く帰らなくてはならなかった。デュポン一家が夕食に来るのだ。

Rothenberg (1971) は大過去形の実例を挙げていないが、語りの文章で複合過去形が時制の一致を起こせば、次の e. のように大過去形を取ると考えられる。ちなみに *Il y a* の取る時制は現在形と半過去形のみとされている。

e. *Je ne pouvais pas venir. Il y avait mon article que je n'avais pas terminé.* [作例]

私に行くことができなかった。記事を書き上げていなかったのだ。

Rothenberg (1971) によると、この構文は *Qu'est-ce qu'il y a ?* 「どうしたのですか」、*Quoi ?* 「何ですか」、*Pourquoi ?* 「どうしてですか」という問に答えるものだという。先行文脈で述べられたこと (=私はもう帰らなくてはならない) や、発話の場の状況に含まれた出来事 (=いつもは日曜に開いている店が閉まっている) の理由を説明するのがこの構文の談話的機能である。現在の事態の理由として挙げるができるのは、現在か直近の過去か直近の未来にある出来事・状況である。このため *Il y a* が現在形のときは、関係節の時制は現在形、複合過去形 (結果状態を含む)、近接未来形が使われると考えられる。Rothenberg は挙げていないが近接過去形も可能ではないか。

f. *Zut ! Il y a Michel qui vient de passer ! J'avais quelque chose à lui dire.* [作例]

しまった。ミシェルが通り過ぎたところだ。あいつに言いたいことがあったのだ。

また *Il y a* が半過去形のときは、現在形と複合過去形と近接未来形が時制の一致を起こして、半過去形、大過去形、半過去に置かれた近接未来形になると考えられる。

(3) 〈C'est+名詞句+ qui〉構文：その 2

Rothenberg (1971) が挙げている例を見ると、複合過去形、半過去形、単純未来形、近接未来形があり、朝倉文法事典には単純過去形の例がある。

a. *C'est Sidonie qui va être étonnée !* [近接未来形]

シドニーはさぞかし驚くことでしょう。

b. *C'est la mule qui fut désappointée le lendemain.* (Daudet) [単純過去形]

翌日になってロバはがっかりしたのです。

c. *C'est ton père qui sera content !* [単純未来形]

お父さんはさぞ喜ぶことでしょう。

d. *C'est Jean qui a été surpris !* [複合過去形]

ジャンの驚いたことといたら。

e. *C'est le grand qui riait !* (Daudet) (朝倉季雄『新フランス文法事典』)

兄貴の笑ったこと。

Rothenberg (1971) はこの構文では現在形と半過去形は使えないとしている。しかし上の e. の例があり、半過去形は可能なようである。現在形が使えないことを見ても、この構文は〈C'est+名詞句+qui〉構文や〈Il y a+名詞句+ qui〉構文のような事象叙述文ではないと考えられる。

Rothenberg (1971) はこの構文の談話的機能について次のように述べている。

*Le syntagme Les lapins qui ont été étonnés !* introduit par C'EST est un PRÉDICAT. Mais alors que le prédicat de la construction II également introduit par C'EST identifiait le thème constitué par la situation, le PRÉDICAT de la construction sous rubrique exprime la constatation effective ou attendue d'une réaction affective au THÈME constitué par la situation implicite ou explicite. (Rothenberg 1971 : 110)

C'est が導入する「ウサギたちの驚いたことといたら」は述語である。同じように C'est が導入する構文 II (=〈C'est+名詞句+qui〉の 1 型) の述語には状況に含まれた主題を同定する働きがあったが、この構文の述語は、明示的であれ暗々裡であれ、状況に含まれた主題を前にしたときの感情的反応を確認するか、または期待することを表している。

Rothenberg (1971) のこの分析はあまり妥当なものとは思えないが、この構文は研究が少なく、また上の分析と関係節の時制の選択にはあまりつながりがないので、これ以上は考察しない。

#### (4) 〈Voilà+名詞句+qui〉構文

Rothenberg (1971) はこの構文で使われるのは現在形と半過去形のみとしている。

a. *Voilà Simone qui arrive !* [現在形]

ほら、シモーヌがやって来た。

b. *Oh ! Voilà Marie qui se précipite dans ses bras !* [現在形]

ああ、マリーが彼の腕の中に飛び込んで行くよ。

半過去形の例は挙げられていない。また語りの文脈で使用されると、歴史的現在形になるという指摘がある。

c. *Dès que l'alarme fut donnée, voilà le voleur qui s'enfuit.*

警報が鳴るとすぐに泥棒は逃げ出した。

Rothenberg (1971) によればこの構文は、発話の場に含まれるある状況に聞き手の注意を引き、何らかの反応を呼び起こすという談話機能があるとされている。今ここで起きている状況・出来事に注意を引く場合、最もよく用いられるのは現在形であろう。

d. *Voilà Jean qui s'en va !*

ほら、ジャンが帰ってしまうよ。

近接未来形や結果状態の複合過去形が表すものも、現在の状況に含まれることができるはずだが、実例は挙げられていない。

N. B. 朝倉季雄『新フランス文法事典』には、〈*Voilà*+名詞句 *qui*〉構文の先行詞は3人称に限られるという記述がある。1・2人称には関係節ではなく、現在分詞か不定詞を用いるという。この構文には人称制約もあるようだ。

i) *Me voici errant au milieu des maisonnettes de bois et de papier.*

私は今、木と紙の家の間をさまよっている。

ii) *Me voici à trembler comme une pensionnaire.*

今や私は女子寮の学生のように震えている。

(5) 〈*Et*+名詞句・代名詞 *qui*〉構文

Rothenberg (1971) はこの構文には、現在形、半過去形、複合過去形、大過去形が使われるとしている。(近接過去形の例も挙げられている) ただし、複合過去形の例は挙げられていない。

a. *Et Basile qui ne vient pas !* [現在形]

なのに(おまけに)バジルが来ないときた。

b. *Et Jean qui vient de partir !* [近接過去形]

なのに(おまけに)ジャンが帰ってしまった。

c. *Achète du café et des croissants ! Ah, et le sucre que j'oubliais !* [半過去形]

コーヒーとクロワッサンを買っておくれ。ああ、砂糖を忘れるところだった。

d. *Les Dupont sont partis. Et Paul qui avait promis de rester !* [大過去形]

デュポンさん一家は帰ってしまった。ポールは居残ると約束していたのに。

Rothenberg (1971) によればこの構文は、そうあるべきだった状況 (*la situation qu'il devait y avoir*) と現実の状況 (*celle qui existe effectivement*) の対比 (*contraste*) を表すとされている。

a.では「バジルが来る」がそうあるべきだった状況で、*qui ne vient pas* は現実の状況を表している。b.も同様である。このとき現実の状況を表すのは現在形や近接過去形や結果状態の複合過去形であろう。しかし、d.では「ポールが居残る」がそうあるべきであった状況で、*Les Duponts sont partis.*が現実の状況である。関係節 *qui avait promis de rester* はそのどちらでもない。挙げられている例は均質なものではなく、いくつかのグループに分かれるようである。ここではこれ以上考察しない。

(6) 〈名詞句+*qui*〉構文

a. *Madame, votre sac qui est ouvert !* [現在形]

もしもし、かばんの口が開いていますよ。

b. *Ah, s'écria-t-elle, votre collier qui s'est cassé !* [複合過去形]

「ああ」と彼女は叫んだ。「あなたの首飾りが壊れてしまった」

c. *Regardez ! Le vase qui va tomber !* [近接未来形]

見て。花瓶が倒れる。

d. Il vint deux heures en retard. Il s'était perdu. Un tas de bois qu'on avait déplacé au tournant d'un chemin. [大過去形]

彼は 2 時間遅れてやって来た。道に迷ったのだ。道の曲がり角に木材の山が移し置かれていたのだ。

e. Seulement, au dernier étage, la lampe du roi qui veillait. [半過去形]

ただ最上階には王のランプが夜通し灯っていた。

f. Il répétait : Monsieur Michel que je ne verrai plus ! [単純未来形]

彼は繰り返し言った。「ミッシェル様にもうお会いできないなんて」

g. Madame Floche qui vient de mourir ! [近接過去形]

フォッシュ夫人が亡くなられた。

Rothenberg (1971) はこれを独自の構文とは認めておらず、〈C'est + 名詞句 + qui〉構文や〈Il y a + 名詞句 + qui〉構文の C'est / Il y a が省略されたものとしている。このため多くの時制が見られるが、基本は発話時現在を基点とする、現在形、直近を表す複合過去形、近接過去形、近接未来形である。半過去形と大過去形は、それぞれ現在形と複合過去形が語りの文脈で時制の一致を起こしたものである。f.のように単純未来形も使うことができるようである。

#### (7) 時制のまとめ

これらの擬似関係節構文は Rothenberg (1971) が指摘しているように、直前の先行文脈や (ex. 物音がした)、話し手と聞き手のいる発話の場に存在・生起する状況・出来事 (ex. 店がしまっている) を主題 (thème) として、それを同定したり説明したりする談話的機能を持つ。このため発話時現在を基点とする ① 現在形 ② 複合過去形 ③ 近接過去形 ④ 近接未来形 が多く用いられている。半過去形と大過去形は、語りの文脈で現在形と複合過去形が時制の一致を起こしたものである。このような時制の分布を見ても擬似関係節構文は話し手と聞き手のいる発話の場に密着した構文であることがわかるだろう。

ただし時制の一致によるものではない半過去形・大過去形も若干見られる。

a. Prosper ! ... Moi qui vous croyais à Metz !

プロスペルじゃないか。あなたはメスにいるとばかり思っていたのに。

b. Les Dupont sont partis. Et Paul qui avait promis de rester !

デュポン一家は帰ってしまった。ポールは居残ると約束していたのに。

このような半過去形・大過去形は現在との対比や断絶を表す discours の半過去形・大過去形であり、やはり発話の場とのつながりが強いことがわかる。

#### 8. 擬似関係節は第三の関係節か？

Sandfeld が属詞的關係節 (proposition relative attributive) と呼ぶ構文は、制限的關係節と非制限的關係節の中間的性格を持つとした。確かに擬似關係節は、制限節にも非制限節にもぴったり納まらない独自の特性がある。しかしほんとうに擬似關係節は、第三的關係節なのだろうか。この問題を先行詞の意味的特性と限定、および擬似關係節が表す意味内容のふたつの側面から考えてみよう。

(1) 定冠詞・指示形容詞・所有形容詞で限定された定名詞句は、制限節の先行詞になることができる。

a. *Voilà le livre que j'ai lu hier.* [定冠詞]

これが私が昨日読んだ本だ。

b. *Prends ce livre qui est sur la table.* [指示形容詞]

(新倉俊一他『フランス語ハンドブック』白水社、1978)

テーブルの上にある本を取ってくれ。

c. *Tu peux utiliser ma voiture qui est garée dans la cour.* [所有形容詞]

中庭に駐めてある私の車を使っていいよ。

不定冠詞で限定された不定名詞句も制限節の先行詞になることができる。

d. *Au Japon, il est presque impossible de trouver un café qui vous permette de voir la rue.* [不定冠詞単数形]

日本では外の通りを眺められる喫茶店を見つけることはほぼ不可能だ。

e. *Elle s'était efforcée d'avoir deux œufs avec lesquels elle a préparé une omelette.*

彼女は何とか卵を二つ手に入れてオムレツを作った。[不定冠詞複数形]

f. *Mais dès le début des travaux, il y avait de l'eau qui stagnait sur la surface et qui s'écoulait par les côtés.* [部分冠詞]

しかし工事の始めから表面に溜まっている水があって、側面から流れ出ていた。

制限節の先行詞になれないのは固有名詞である。

g. *\*Elle est allée voir Catherine Arley qui est l'auteur de La femme de paille.*

彼女は『わらの女』の著者のカトリーヌ・アルレーに会いに行った。

一方、非制限節は固有名詞を含めて、先行詞になれる名詞句に制限はない。

h. *C'était un homme de haute taille, jeune encore, auquel des yeux rêveurs donnaient une expression de timidité.* [不定冠詞]

それは背が高くまだ若い男で、夢見るような瞳が内気そうな印象を与えていた。

i. *Ces arbres, que l'on soigne peu, restent vigoureux.* [指示形容詞]

この木はほとんど手入れをしないのに元気だ。

(朝倉俊一他『フランス語ハンドブック』白水社、1978)

j. *Son fiancé, qui est le vice-consul de l'Estonie, adore les peintures de Degas.*

彼女の婚約者はエストニアの副領事で、ドガの絵がとても好きだ。[所有形容詞]

k. *La tour Eiffel, qui est le symbole de Paris, a été construite en 1889.* [固有名詞]

エッフェル塔はパリのシンボルで、1889年に建てられた。

(2) 擬似関係節の先行詞

Sandfeld (1936) が挙げている擬似関係節の先行詞を限定の種類別に調査すると、次のような結果が得られた。

① 固有名詞 39

ex. *J'ai Jenny qui m'attend au d'Harcourt.*

ジェニーがダルクールで私を待っているんだ。

② 定名詞句 140

ex. Entends-tu *la porte qui craque* ?

ドアのきしむ音がしたのが聞こえたか。

③ 不定名詞句 31

ex. Nous avons toujours *un de nos livres qui venait de paraître*.

いつでも私たちが書いた本のどれかが出版されたばかりという状態だった。

④ その他 3 (疑問代名詞、不定代名詞など)

固有名詞も限定という点では定なので、固有名詞と定名詞句を合算すると定の先行詞が 179 となり、不定よりはるかに多いことがわかる。なぜ擬似関係節では定の先行詞が多いのだろうか。

【参考】

不定の先行詞はある特定の構文に集中して現れることがわかった。

① 転位構文

a. *Un artiste qui aime vraiment les tableaux d'un autre artiste, quand ils sont du même âge et rivaux, ça n'est pas commun.*

画家が別の画家の絵を心から好きだということは、二人が同じ年齢でライバル関係にある場合はめったにないことだ。

② 同格句

b. *il déplorait une faute qu'il avait commise, une jolie fille brune qui s'était introduite chez lui, dont il n'avait pas su s'abstenir.*

彼は昔自分が犯した過ちを悔やんでいた。茶色の髪をした美しい女性が彼の家に入って来て、手を出すことを我慢できなかったのだ。

③ 〈名詞句+qui〉構文

c. *C'est pour aller jusqu'en bas. Des vieux copains qui m'attendent à l'apéritif.*

ちょっと下に行くだけだ。昔の友だちがいっしょにアペリティフを飲もうと待っているんだ。

(3) 固有名詞が制限節で使えないのは、制限節が持つ限定という機能によると考えられている。制限節は限定修飾することによって、先行詞が表す指示対象の集合の外延を狭めるとされている。これにたいして非制限節は主節とは独立した断定を表し、先行詞の集合の外延を狭めることがない。

a. *Les étudiants qui veulent suivre ce cours doivent s'inscrire avant le 1<sup>er</sup> octobre.*

この講義の受講を希望する学生は 10 月 1 日までに登録しなくてはならない。

b. *Paul Delvaux, que vous connaissez de nom sans doute, est un peintre belge de tendance surréaliste.*

ポール・デルヴォーはあなたもたぶん名前は知っているでしょうが、ベルギーのシュルレアリスト的画風の画家です。

固有名詞が先行詞に制限節を付けると、ただ一つしかない指示対象に限定を加えて外延を狭めることになり、それは固有名詞の指示対象の「唯一的存在」という有り様と矛盾する。

c. *\*Mira Ariel que nous avons croisée est une linguiste israélienne.*

私たちがすれちがったミラ・アリエルはイスラエルの言語学者です。

もしこうすると、「私たちがすれちがったミラ・アリエル」と「それ以外のミラ・アリエル」がいるということになってしまう。

(4) ここで文中での指示対象の有り様を思い出してみよう。益岡隆志『モダリティの文法』（くろしお出版、1991）は、文の類型を大きく「属性叙述文」と「事象叙述文」とに分けた。

a. 花子はテレビのスイッチを入れた。

属性叙述文は存在が確定している対象について何かを述べる文である。この例の主語の「花子」は主題であり、この文の陳述とは独立に、例えば先行文脈ですでに登場しているなどの理由によって、談話内にすでに存在するものである。

b. 雨が降っている。

これにたいして事象叙述文は、存在・生起する出来事を客観的に報告するものであり、出来事に含まれた対象（雨）は出来事に依存し、出来事の内部でその存在が認定されるものであるとされている。

(6) Lambrecht (1998) も同じように、次のような現象文に含まれた対象は出来事に依存すると述べている。(1)~(3)はここで扱っている擬似関係節構文である。

(1) Y'a Jean qu'a téléphoné. [=Il y a Jean qui a téléphoné.]

ジャンが電話してきたよ。

(2) Y'a le téléphone qui sonne ! [=Il y a le téléphone qui sonne !]

電話が鳴ってるよ。

(3) J'ai les yeux qui m'font mal. [=J'ai les yeux qui me font mal.]

目が痛い。

(4) My CAR broke down. [CAR にアクセント]

車が故障した。

(5) Mi si è rotta la macchina. [イタリア語]

me s'est cassé la voiture (me は間接目的補語)

As I mentioned earlier, the function of these event-reporting utterances deviates from the presentational function proper as defined e.g. by Hetzron. In some important sense, all these short two-clause utterances express single, non-complex pieces of propositional information, comparable to the short monoclausal English and Italian utterances (4) and (5). They constitute self-contained messages of a kind which Chafe (1974 : 115) calls 'conceptual unities'. In these unities, the NP referents have no pragmatic saliency beyond the clauses in which they occur. They do not matter as individuals, but only as necessary elements in the expressed proposition. In sum, the self-contained pieces of information expressed in these *avoir*-clefts are *reports of events*, not *comments* about some *topic*.

(Lambrecht, Knud, "Presentational cleft constructions in spoken French", J. Haiman & S.A.Thompson (eds) *Clause Combining in Grammar and Discourse*, J. Benjamins, 1998)

すでに述べたように、このような出来事報告文の機能は、たとえばヘツロンが定義したような (cf.を参照) ふつうの提示機能とは異なる。重要なのは、二つの節からなる短いこの発話は、複文でなく単文が担う情報を表している点である。それは (4) や (5) のような英語やイタリア語の単文が表すものと同じである。これらの文

は、チェイフ (1994) が「概念の単位」と呼んだような完結したメッセージである。このまとまりの中で、名詞句が表す指示対象は、それが生じている文を超えるような語用論的卓立性を持たない。文に含まれた対象は個体として重要なのではなく、文が表す情報の一部としてのみ必要なのである。要するに、このような avoir 分裂文が表す完結した情報とは、「出来事の報告」なのであって、「主題についての解説」ではない。

cf. Chafe, Wallace, “Language and consciousness”, *Language* 50, 1974.

Hetzron, R., “Presentative function and presentative movement”, *Studies in African Linguistics*, supplement #2, 1971.

(7) 単一判断 (thetic judgment) と二重判断 (categorical judgment) の区別を提唱した黒田成幸も、A dog is running. 「犬が走っている」という単一判断文 (= 事象叙述文) は、i) Running of X, ii) X is a dog というふたつの要素からなるが、この文の主眼は i) であり ii) は i) に従属すると次のように述べている。

(11.1) Running of X

(11.2) X is a dog.

... (11.2) represents the function of naming the entity involved in the event. One might assume that the act of naming X as a dog (...) involves the judgment that the thing doing the action (...) is a dog. But this judgment (...) is subordinated to the kernel judgment represented by (11.1). And this kernel judgment represents direct recognition of the event of something running.

(S.-Y. Kuroda, “The categorical and the thetic judgment. Evidence from Japanese Syntax,” *Foundations of Language* 9, 1972) [東郷が一部改変]

(11.1) X が走っていること

(11.2) X は犬である

(11.2) には出来事に含まれている対象の名前を述べる機能がある。X が犬だと述べることは、その行為を行なっているものが犬であると判断することを前提とすると思われるかもしれない。しかしながらこの判断は文の核心をなす(11.1)という判断に従属している。そしてこの核心をなす判断が何か走っているという出来事の直接の認識を表すのである。

(8) すでに述べたように、ここで扱う構文の〈先行詞＋擬似関係節〉は、現実を生起した(しつつある)一回きりの出来事を表すものである。

a. J'ai Jeanne qui m'attend en bas. ジャンヌが下で私を待っている。

出来事

b. Attention ! Le vase qui tombe! 気をつけて。花瓶が倒れる。

出来事

益岡や Lambrecht や Kuroda の言うように、出来事(事象)を表す四角に含まれた対象 (= Jeanne, le vase) は独立に存在するのではなく出来事に従属とするならば、どのようなメカニズムによってそうなるのだろうか。

(9) アメリカの言語哲学者 Gregory N. Carlson (ロチェスター大学名誉教授) は、私た

ちが対象を認識するとき、対象の存在様態には 3 種類を区別できるとした。

a. 類 (kind) レベル

類概念を表わし、時間にも空間にも束縛されずに存在する個体である。

ex. (生物種としての) ライオン、鉄、サクラ、自由、etc.

b. 個体 (object) レベル

特定の個体を表し、時間には束縛されないが空間には束縛され、同時に複数の場所に存在することはできない。

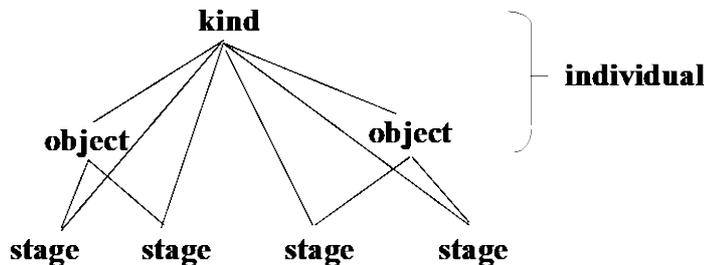
ex. (友人の) 田中君、(うちの犬の) ポチ、私の車、etc.

c. 局面 (stage) レベル

類 (kind) または個体 (object) の時間的切片で、時間と空間の両方に束縛され、特定の時間・特定の場所にしか存在することができない。

ex. 今朝すれちがった田中君、今走っているポチ、etc.

類と個体はまとめて個体 (individual) と呼ばれる。下の図が表しているように、個体 (object) は類 (kind) から切り出され、局面 (stage) は個体と類から切り出される。



(Carlson, G., *Reference to kinds in English*, Ph.D. thesis, 1977, published by Garland 1980)

(10) Carlson が提案した対象の存在様態の区別は言語に反映されている。

① 総称文は類についての文である。フランス語で類を表すのは定冠詞単数 (le) と定冠詞複数 (les) である。

a. *Le chat est carnivore.* ネコは肉食である。

b. *Les chats sont carnivores.* ネコは肉食である。

不定冠詞単数 (un) は総称文で使われることがあるが、本来は類を表わさない。

c. ??*Un chat est carnivore.*

不定冠詞複数 (des) と部分冠詞 (du, de la) は類を表すことはない。

d. \**Du vin rouge est bon pour la santé.* 赤ワインは健康によい。

② abonder 「たくさんいる」、s'éteindre 「絶滅する」、être éteint 「絶滅している」、être inventé 「発明される」、être carnivore 「肉食である」、se raréfier 「数が減っている」などは類述語 (kind predicate / prédicat de classe) と呼ばれていて、類しか主語になれない。

a. *Les castors abondent dans cette région.*

ビーバーはこの地域にはたくさんいる。

b. *Le bronze a été inventé vers 3,000 avant Jésus-Christ.*

青銅は紀元前 3000 年頃に発明された。

c. \**Mon chat abonde dans ce quartier.*

うちのネコはこの界隈にたくさんいる。

③ être grand 「背が高い」、avoir des yeux bleus 「目が青い」、être roux 「赤毛である」、avoir quatre roues 「4 輪である」のように、恒常的属性を表す述語は個体レベル述語 (individual-level predicate) と呼ばれていて、類と個体を主語とする。

a. *Le lion mâle a une crinière.* [類]

雄のライオンにはたてがみがある。

b. *Mon frère est roux.* [個体]

兄は赤毛だ。

c. *?Un collègue est myope.*

同僚が一人近視だ。

**N. B.** 不定冠詞 (un) はどれだかわかっていない不特定の対象を表すので、個体レベル述語の主語になりにくい。

④ 一時的な状態を表す述語 (ex. être couché 「横になっている」、avoir faim 「お腹がすいている」、etc.) や、動作・出来事を表す述語 (ex. courir 「走る」、tomber en panne 「故障する」) は局面レベル述語 (stage-level predicate) と呼ばれている。局面レベル述語は局面 (stage) しか主語に取ることができない。個体 (object) が局面レベル述語の主語となるとき、個体は局面へと変化する。

a. *Mon chien court dans le jardin.*

うちの犬が庭を走っている。

→「走っている」というのは一時的動作であり、限られた時間しか継続しない。

mon chien は時間的切片として存在する局面 (stage) として認識される。

個体レベルの存在を [O] とし、局面レベルの存在を [S] と記号で表すと次のようになる。

b. *Mon chien [O] est intelligent.* [個体+個体レベル述語]

うちの犬は賢い。

c. *Mon chien [S] court dans le jardin.* [局面+局面レベル述語]

うちの犬が庭を走っている。

(11) p. 33 の(5)③で見たように、擬似関係節構文に使われる述語は、一回きりの出来事を表すものでなくてはならず、恒常的状态や恒常的属性を表す述語は用いることができない。

a. *Il est là qui nous attend.* [一時的出来事]

彼があそこで私たちが待っている。

b. *\*Il est là qui est obèse maintenant.* [恒常的属性]

彼が今や太ってあそこにいる。

Carlson の用語を用いて表現すると次のようになる。

**【擬似関係節の述語制約】**

擬似関係節が表す二次述語は局面レベル (stage-level) でなくてはならない。個体レベル (individual-level) の述語は用いることができない。

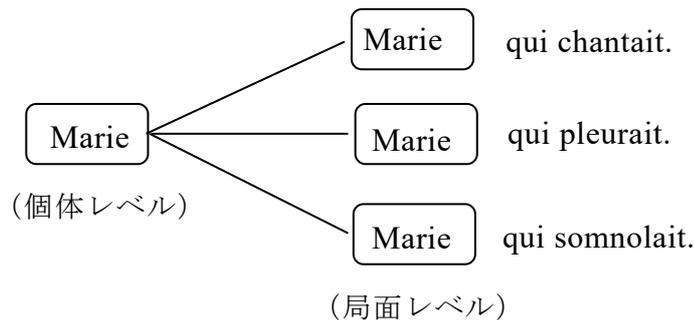
(12) 局面レベルの対象とは、個体レベルの対象の時間的切片である。たとえばうちの犬のポチについて「うちのポチは賢い」というときは、個体レベルの対象として認識

されている（時間的に安定し変化しない）。個体としてのポチはただ一頭しかいない犬である。

しかしポチの時間的切片を考えると、「昨日元気がなかったポチ」「先月足を怪我したポチ」のように、さまざまな場面を思い浮かべることができ、時間的に変化する存在と捉えていることがわかる。このように個体を局面として捉えると複数化する。

このように考えると、擬似関係節は複数化した局面レベルの対象から、修飾限定することによって対象の時間的切片を取り出していると考えられることもできる。

**J'ai vu Marie qui pleurait.** 私はマリーが泣いているところ/のを見た。



### (13) 擬似関係節の働きに関する仮説

擬似関係節は、制限的關係節とも非制限的關係節とも異なる第三の關係節だとされることが多いが、そうではなく、制限的關係節の一種だと考えられる。ただし、關係節の修飾限定が何に作用するかが異なる。

制限的關係節は、先行詞の指示対象を含む文脈的に限定された集合、または先行詞が表す類集合を対象として修飾限定する。先行詞が表すのは個体レベルの対象である。

#### a. *Les élèves qui n'avaient pas bien travaillé ont raté l'examen.*

よく勉強しなかった生徒は試験に落ちた。

→ 關係節がかかる集合は、文脈的に限定された「うちのクラスの生徒」または「3年生の生徒全体」などで、關係節はその集合から「よく勉強しなかった生徒」という部分集合を取り出す。

#### b. *J'ai croisé une étudiante qui portait un chapeau rouge dans la cour.*

私は中庭で赤い帽子を被った女子学生とすれ違った。

→ 關係節がかかる集合は、先行詞 *étudiante* 「女子学生」が表す類集合で、關係節はその中から「赤い帽子を被った女子学生」という個体をひとつ取り出す。

これにたいして擬似關係節は、先行詞が表す個体レベルの対象の局面レベルの集合にかかり、その中からひとつの局面を取り出すと考えられる。

#### c. *J'ai Nicole qui m'attend en bas.*

下でニコルが私を待っている。

→ 關係節がかかるのは先行詞 *Nicole* の局面レベル、すなわち時間的切片の集合で、關係節はその集合の中から局面レベルをひとつ取り出す。

このように、制限的關係節も擬似關係節も「先行詞の修飾限定」という働きは同じ

だが、それが働く存在レベルが異なると考えられる。制限的關係節は個体の集合から個体を取り出し、擬似關係節は局面の集合から局面を取り出す。

(14) このように考えると、いくつかのことを自動的に説明できるようになる。

① なぜ擬似關係節では一回切りの出来事や一時的状態を表す述語しか使えないかが説明できる。一回切りの出来事や一時的状態を表す述語は限られた時間幅に起きる事行を表し、先行詞が表す個体を時間的な切片へと切り出す。恒常的属性を表す述語にはそのような働きがない。

② 擬似關係節の先行詞には固有名詞や定名詞句が多いことが説明できる。固有名詞や定名詞句は個体を表す。擬似關係節の働きによって個体から局面が切り出されるので、その働きによく合致している。

③ 擬似關係節構文では、*trois fois* 「3回」や *plusieurs fois* 「何度も」など頻度・回数を表す副詞を使うことができないのを説明できる。

a.\**Je l'ai trois fois vu qui allait au cinéma.*

私は彼が映画に行くのを3回見た。

ひとつの局面はひとつの出来事にしか関わることができない。局面はある特定の時間幅に切り出された存在だからである。「3回見た」は局面ではなく、個体について成り立つ属性である。このために擬似關係節構文では不適格になる。